

東方と色々なアニメ

レミフラ.スカーレット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のミスによって死んでしまった俺は、転生の機会を与えられて、ヒロアカの世界に転生した。そこでの生活は一体、どんなものなのだろうか

目次

転生したぜ！	1
喧嘩は良くないよ	4
喧嘩するぜい	7
ああ、疲れた	11
これぞ日常	14
入学式だぜ	17
登場人物の紹介	19
ヘドロ事件：前編	21
ヘドロ事件：中編	24
ヘドロ事件：後編	28
個性の譲渡	32
試験当日！	35
通知が来ない	38
通知が来た!!!	41
中学生ラストスパート	43
雄英に行くぜ！	45
雄英に入学！	48
個性把握テストの結果とその後	51
戦闘訓練	53
個性の強化	55
学級委員決めます	58
USJ襲撃	61
し、死ぬかと思った	63
〇〇との対戦！	66

久しぶりのゆったりした休日	68
体育祭があるって！	72
雄英体育祭、開催!!	77
体育祭：中編	80
体育祭：後編	83
体育祭後の休日	89
振替休日、帰りの道中	92
指名の発表！	95
インターン開始！	97
脳無襲撃	99
ヴィラン襲撃を止めます	102
幻想郷との関わり	107
入院生活	110
演習試験、その準備	112
演習試験開始！	114
幻想郷との関わり part 2	117
試験結果と買い物へ	120
夏期合宿開始	123
夏期合宿地へ集合！	127
夏期合宿1日目終了	131
夏期合宿2日目以降	135
肝試し&ヴィラン襲撃！	138
爆豪救出に向けて	147

転生したぜ！

あー、暇だなー。学校に居る時って何か物凄く暇なんだよな。しかも社会の授業だからな、眠くなるのは仕方がない事だと思うのだよ、うん。それにしても何か起きないかなー……あ、そういえば今日は新しいゲームの発売日だったな。帰りに買いに行くか。でも金足りるかな。まあいつか！足りなかつたら足りなかつたで後日また来ればいいし

そんなこんなで学校が終わり、帰りに新作のゲームを買いに店へと向かっていると

「危ない！」

「へ？」

ドーン！

俺は車に撥ねられた。クツソ、痛え！頭がガンガンするし、体なんかピクリとも動かねえ。あー、俺、ここで死ぬのかな。死ぬならせめて新作のゲームをやってから死にたかつたぜ……そんなところ考えてたら、そろそろ死にそうだ。ああ、推しキャラの皆様が俺の脳裏に浮かんでくる。推しキャラに囲まれて死ねるなら、まあ、いいかな

ん？ここどこ？あ、俺は死んだのか。ならここはあの世か？でも、あの世にしちや殺風景なとこだな。

そう、俺は死んだと思ったら、何か真っ白い空間にいたんだ。見渡す限り何も無く、果てしない

「あの一」

「ひゃい！なんでしゅか!？」

か、囁んだ……恥ずかし過ぎる。しかも綺麗な女の人だし！ああ、死にたい！あ、もう死んでるんだっけ

「この度は、申し訳ございませんでした！」

「…はい？どゆこと？」

何か急に謝りだしたんだけど。どつたの？何か俺にしたの？

「実は、私は生物の命を司る神の部下なのですが、この度、私の上司のミスによって、貴方様の命を終わらせてしまいました。本当に、申し訳ございません」

あ、何か小説とかアニメとかでありそうな展開。でもま、俺は生前に戻ったって何も楽しい事ないし、全然大丈夫なんだよなあ。ハッハッハ

「いや、大丈夫っすよ？俺は別に生前に未練がある訳ではありませんので」

「ほ、本当でしょうか？ですが、それでは私共の示しがつきません。ですので、貴方様を別世界に転生させ、新たな生活をしてもらいたいです。条件は何なりとお出しく下さい。何でも聞き入れますので」

おー！凄！ならヒロアカの世界に行きたいな！個性は俺の知ってるキャラの能力や個性、技をコピー出来るやつかな！そうと決まれば早速相談だ！

「えー、じゃあ俺からの条件は2つ。1つが俺をヒロアカの世界に転生させて欲しい。もう1つが、俺の個性をコピーにして欲しい。俺が知ってるキャラの能力や個性、技なんかをコピー出来るようになる」

「分かりました！それでは早速転生しちゃいましょう！強力な個性は身を滅ぼしてしまう事もありますので、お気を付けて」

「おう！じゃ、よろしくー！」

「お任せ下さい！それでは、良い人生を！」

はい、という事で俺、いや、今は私か。私は転生しました。それもチート級の個性を持って。今は赤ん坊として産まれたところですね。出産の描写？そんなの書かないよ。もう作者が死にかけなんだ。作者は1000文字以上の話は滅多に書かないんだよ。そんなこんなで名付けの時。

「この子の名前は彩綺だ。よろしくな、彩綺」

「よろしくね、彩綺」

「あーうー」

お、私の名前は彩綺に決まったようだな。そんじやま、これからの生活に期待をしよう。ここなら面白い事も沢山あるかもしれないし。その前にこの口調直さなきゃならんな。一応女子として産まれたからには、女の子らしくしななければな。うん、頑張ろう

喧嘩は良くないよ

前回神の失敗で転生した彩綺だ。なかなか口調も直らないもので、うっかり男の口調で喋っちゃうかもしれない。そこで思いついたのが、もう口調直さなくてよくね？というものだ。別にボーイツシユな女子って事にすれば何も問題はないはず。だから、自分の事は私と呼ぶ事にするが、それ以外はそのままにすることにしよう。という事でいまは3歳。産まれてからもう3年の月日が経った。私は保育園に通っていて、もう直ぐ個性が分かる為、結構楽しみなのだ。皆がどんな反応をしてくれるのか、それが楽しみで楽しみで、ソワソワすることもある。今までで一番恥づかったのはオムツを変える時だ。それ以外は割と楽しかったのだが、あれだけは慣れない。だからもうオムツはとつくに卒業した。大変だったよ、ある意味。まあそんなこんなで保育園なのだが、正直もうやだ。アニメにも登場する爆豪くんと緑谷くんが喧嘩をしているのだ。といっても爆豪くんが一方的にやっているだけなのだ。だが、爆豪くん強すぎ！保育園に通っている頃から個性ぶっぱなすなんて幾らなんでもやりすぎでしょ！でもま、俺：私も個性はもう使えるのだ、一応。だけど個性は勝手に使っちゃいかんかったと思うし、使わずにいるのだよ。そのせいで周りに無個性だっと思われているようだがな。まあ気にしない気にしない。ハッハッハ！と、それよりも爆豪くんを止めようかね

「爆豪くん、そろそろ辞めたげなよ。緑谷くんが可哀想やぞ」

「ああ!?なんだてめえ！無個性野郎2号！」

ほらな、私の事を無個性だっって言ってる。無個性じゃないのにな「私は無個性じゃないし野郎でもないよ。私の個性はコピー。何なら君の個性をコピーしてもいいよ。でも、それで出来たら緑谷くんを苛めるのはもうやめなよ」

この交渉に応じてくれるか？応じてくれなきゃ私が緑谷くん抱えて逃げ回るけど

「いいぜえ！本当に出来たらデクを苛めるのは辞めてやるよ！」

「お、言ったな？ちゃんと守れよ」

そう言っただけ私には爆豪さんの個性をコピーし、使い始めた。手のひらが爆発してるのだが、私は二トロのような汗は出ないのでそこは魔力でカバーだ。爆破なので火傷もするが、もこたんの能力で何とかしている

「お前、マジで個性持ちだったのかよ」

「そうだよ。見た事無い癖に決めつけるのはあかんよ。ちゃんと本人が言っている事も聞かなくちゃね？爆豪くん」

「けっ！まあいい。約束通り今回はデクを苛めるのは辞めてやるよ。だけど、次はねえからな！」

そんな捨て台詞を吐いて爆豪くんは取り巻きを連れて何処かに行った。取り巻きも言っても、いつも付いて回る2人だがな。さて、緑谷くんは大丈夫か？

「大丈夫かい？緑谷くん」

「うん、ありがとう。彩綺ちゃん」

「どういたしまして♪」

大丈夫そうだな。これなら安心だ。まあ気にするな緑谷くん。君は将来とても強い個性を使えるようになるのだからな

「それにしても彩綺ちゃんって強いね。かっちゃんを追い払っちゃうなんてさ」

「まあ、今まで個性は使ってこなかったけどね。一応勝手に使っちゃいかんかったと思うし」

「そうだね…はあ…僕も皆みたい個性が欲しかったなあ。そうしたらヒーローになって皆を助けられるのに」

oh:予想以上に凹んでもたな。だが、こいつは強くなる。私が保証する！

「大丈夫さ。諦めなければ、いつか道は開くよ」

「うん！だね！僕、諦めないで頑張るよ！」

「そうそうその意気だよ。頑張ってるね。私も出来る事があれば、協力するから」

「うん！ありがとう！」

こうして、緑谷出久は私と一緒に特訓をしたりするようになりまし

た
と
さ

喧嘩するぜい

時は経ち2年後

彩綺 side

はい、前回から2年の月日が経った。今は5歳。もう少しで保育園は卒業して小学校に入る。はあ…小学生は長いし何かとつまらんかなあ。それに勉強はしなくても私は一応前世は高校の2年だったし、大丈夫だろうから授業は聞かなくていいや。分からなくっても大賢者に任せるしな。心配は要らない

「呆……………」

なんか呆れられたよ。悲しい。大賢者は暇な時の話し相手にもなるし、しかも頭も良いから本当に助かってるよ。ホントだよ？

「照……………」

おお、照れた！いやあ、照れた大賢者さんも可愛いですなあ。ん？あれ緑谷くんじゃない？まーた爆豪くんに突つかかれてるよ。でも、2年前の緑谷くんとは違うし、どう対処するのか、気になるところではあるな

「なあデク。お前、あのコピー野郎に特訓付けて貰ってたってな？」

「そうだよ。彩綺ちゃんは強いからね。後彩綺ちゃんは女の子だから、野郎じゃないからね」

おお、嬉しい事言ってくれるじゃないか緑谷くんよ。今度から名前で呼ぼうかな。というか野郎が男の事だつてよく知ってたな

「じゃあ、そいつは俺よりも強いのか？」

爆豪くんとは争いたくないな。勝てるだろうけど、怪我するもんえ？私がどうやって話を聞いているかだつて？それは勿論個性を使つてさ。東方Projectのこいしの能力を使つただけさ

「多分ね。まだ個性を本気で使ったことないらしいけど」

本気で使ったら大変な事になっちゃうよ。この歳で警察に世話になるのは嫌だからね

「そうか、なら、あいつは倒すか。俺の夢の邪魔になりそうだし」

「や、やめなよ、かつちゃん。怪我するよ?」

「へっ! そうだな。怪我するのは俺じゃなくてあいつだけだな」

ほほお、言ってくれるじゃないの。そこまでやりたいならやってもいいけど…面倒臭い

「か、かつちゃん。やめなつて」

「うつせえ! 無個性のくせに俺に指図すんな!」

「ひっ…ごめん」

「分かりやいいんだよ。んで、あいつどこにいるか知ってるのか?」

すまんな爆豪くん。今の私の居場所は誰にも分からんのさ。何せ誰からも見えないようになってるんだからな。ハッハッハ。さて、そろそろ帰ろうかな。親に何か言われるのはもう勘弁だ。この前もちよつと帰りが遅れただけで酷い目に遭った

「ううん、知らない。彩綺ちゃんは普段何をしているのか教えてくれないし」

「そうか。んじやま、探すか。デクも手伝えよ」

「分かったよ」

その頃には私はもう家の中さ。さて、紫の能力使って家に帰るかな。この能力ならどこに行くにも一瞬だし

彩綺 side 終

緑谷 side

「分かったよ」

ごめん彩綺ちゃん。かつちゃんが怖くて彩綺ちゃんを犠牲に…なるべく分からない所に居てくれ

「よし、デク、最初はいいつの家に行くぞ。案内しろ」

ああ、本格的にヤバいかも。いくら彩綺ちゃんでも、こうなっただかつちゃんは止められないだろうし。でも…

「うん、分かった」

ごめん、本当にごめん、彩綺ちゃん

緑谷、爆豪、彩綺の家に到着

ピンポーン

ハイ

ガチャ

「あら？君達彩綺のお友達？」

「はい、急にごめんなさい」

「いいのよ。彩綺ー！お友達が来てるわよー！」

「へーい」

来た！後で彩綺ちゃんには謝らないと

「お、緑谷さんと爆豪くんじゃあないか。どうした家に来るなんて」

「ごめん、彩綺ちゃん」ボソツ

「ん？何か言つて」

「コピー野郎！今すぐ俺と個性使って戦え！それで俺が勝つ！」

ごめん。彩綺ちゃん。爆豪くんを止める勇気は僕にはないよ

「別にいいけどさ、怪我だけはしないでくれよ？」

「上等じゃこらあ！」

緑谷 side 終

彩綺 side

何か喧嘩吹っかけられたわ。いや分かってたけど、分かってたけども家にまで来てそれかい。まあ断る理由はないしいつか

「別にいいけどさ、怪我だけはしないでくれよ？」

「上等じゃこらあ！」

おっと、軽く煽ったらガチギレ寸前じゃないか。こりゃ負けてもやめないな。さて

「爆豪くん。じゃあついてきてくれ。周りに被害が出ないようなところに行くから」

まあ紫の隙間に行くんだけどね。あそこなら限りもないしちやうどいいだろ。周りの建物を補強すればいい？無理無理。戦いながらそれは流石に無理だわ

「この中に入ってくれ。何、別に戦う場所として使うだけだから何かをすることはないさ。そんな卑怯な手、私は好まないし」

「ああ、分かった。デクはどうすんだ?」

「僕は観戦してるから大丈夫だよ」

よし、2人とも入ったな。これで大丈夫だろう

「さて緑谷くん。くれぐれも戦いに巻き込まれる事はないようにしてくれよな?」

「うん、分かったよ」

さてと、これで心置きなく戦える。え? 戦闘狂? いやいや、私は売られた喧嘩を買ったまでさ

「それじゃ爆豪くん、そろそろ始めようか」

「ああ、そうだな。デク! お前開始の合図しろ」

「う、うん! ……よーい、始め!」

ああ、疲れた

彩綺side

前回色々あつて爆豪くんと戦う羽目になった彩綺でございます。今は緑谷くんの合図があつたので爆豪くんが突進してきているところだ。もうあんな火力出せるのかよ…あれ町中でやったら大騒ぎになるぞ。だがまあ、止められればなんてことは無い。という訳でまたコピー使います。私の元々の身体能力じゃあれは絶対避けられないから。コピーするのは…うーん、オールマイトのワンフォーオールでいいかな。あれ結構負担があるけど強いし。まあそんなこんなで

「爆豪くん、いきなり突っ込むなよ。それじゃ簡単に避けられるぞ？」
嘘ですごめんなさい。あれは普通の人じゃ避けられない

「うっせえ！お前は出し惜しみせずにマジでやれ！」

「へいへい。そんなに本気を出して欲しいなら出してあげるよ」

といつても、爆豪くんの弱点が行動のパターンが分かれば勝てるだろうし、そこまでやらなくてもいいだろう

「喰らえこの野郎！」

「喰らわないし私は野郎じゃないよ」

「そんな細けえことはどうでもいいんだよ！」

怖いわ！お前いつかヴィランになりそうだな！ならないようにちゃんと相手してあげなきゃ

「んー、まあ確かに細かいな。だが、当たってやらんぞ」

「クソが！当てれやこの！」

「す、凄い。かっちゃんを相手にあそこまで戦えるなんて」

何か緑谷くんがポカーンとしてるけど私にや関係ないこつた。つと、そろそろ終わらせて帰ろ

「こちらも行かず！避けるよ爆豪くん！」

「誰に言つてやがる！お前の攻撃なんか全部避けてやるわ！」

威勢がいいこつた。だが私が今から使うのはこの世界じゃ私以外出来ない事だ。そう簡単に避けられてたまるかつてんだ

「霊符『夢想封印：改』！」

まあ霊夢の十八番だな。でも一応私なりに改良して怪我はしないようにした。これ殺傷能力はないけどかなり強いからもってこいだろ。ん？私が何故これができるのか？そりゃあ全部の東方のキャラの能力と技を使えるんだからね。霊力以外にも、魔力や妖力、後は神力なんかも使えるぞ。これのおかげで色々出来るのだからな

「これは…避け…れない」チーン

「凄い。本当にかっちゃんに勝っちゃった！」

まあ当たり前だ。こんな単調な攻撃しかしない奴に負けるかっての。さてと、家に帰ろ

「2人共、家に送るからそこに居てよ。動かれると探すの大変だから」

「う、うん！」

「……」

あら？爆豪くんは気絶しちゃいましたか？でもまあ、それが1番楽でいいや。ちゃんとベッドに落とそうか

「んじやま、また明日ね」

「うん！バイバイ！」

そうして私と爆豪くんの戦いは終わった。いやあ、なんだかんだ言っても、やっぱり疲れるもんやなあ。ちゃんと2人帰れたかな？まあいいつか。帰ろ

「母さん、ただいまあ」

「あら、お帰り。お友達はどうしたの？」

「もう家に帰ったよ。遊び疲れたみたいだし、個性使って送って来た」「また個性を使って…！勝手に使ったらダメだっていつも言ってるじゃない！」

あ、やべ。母さんの前でそれは言っちゃいけないかったな。私は個性を使いこなせるけど、母さんは使う事を許さない。もしかしたら、相手も自分も怪我をするかもしれないからだ。これは自分が悪いし、素直に謝るところ

「ごめん、母さん。でも、遊び疲れて寝てたらもうどうしようもないんだよ。子供に運ばせるには大変だろうからさ。もう気を付けるから、今回だけは見逃して下さい」ペコリ

「……はあ。まあいいわ。今回は見逃してあげる。でも！次はないからね！」

何かデジャブを感じる。何年前かに爆豪くんに言われた気がする。まあいいや。ぐご飯出来るまで寝てよ

「母さん、私ちよつと寝るから、ぐご飯出来たら起こして」

「分かったわ。おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

そして私は、自室で体を休めるのだった

これぞ日常

はい、私は今疲れからかとても眠く、ベッドの上で寝ているところです。一応母さんが起こしに来たら起きられるようにしているけど、まだ大丈夫そうだね。で、今私は変な夢を見ている。何かって言うと、私が知ってるキャラ、特に推しキャラが何故か生首ゆっくりの状態にいるのだ。これを見た時は驚いた。普段顔に表さない私もかなりビツクリしたよ

「あのー、アナタ達は どうしてここに？」

「ん？いや、あんたの夢の中だろう。あんたが知らないのに私等が知るわけなからう」

ああ、それもそうですねえ。でも、この意味わからん状況も、考えようによっては樂園ですな。だって前世で会いたかった推しキャラが皆ここにいるんだからさ

「そうですねえ。私にも分かりませんねえ」

ん？おっと、母さんが起こしに来ているな。そろそろ起きなければまた怒られてしまう。寝すぎだと。でも、推しキャラを眺めていたんだよなあ。まあ、夢の中だし、何時でも会えるだろうから、気にしないでおこう

「彩綺！起きなさい！ご飯抜きにするわよ！」

「ごめんなさい起きますからそれだけはお勘弁を！」

などと茶番を繰り返すのも何時もの習慣。これに乗ってくれる母さんは優しいのだろう。それか私がまだ子供だからか。いや、そんな事は今はどっちでもいい。それより飯だ飯

キッチンに到着

いい匂いだなあ。母さんのこの料理のスキルは凄い。何でも、私を妊娠する少し前までは、飲食店に務めていたようだ。そりゃ料理も美味しくなるわ

「彩綺ー。運ぶの手伝ってくれるー？」

「はーい」

さっさと運んで早く食べよう

「いただきます」

いやあ、美味しい！母さんの料理は世界一だね！マジで美味しいよ。これは友達の親の料理食べれなくなっちゃうね

そんなこんなでどんどん食べていき…

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした。食器は流しの中に入れて置いてね」

「いや、今日は私が洗うよ。何時もやってもらっちゃってるし」

え？父さん？この時間は仕事だよ。大体私が寝てる時間に帰ってくるんだ。その分休みの時は遊んでくれるからいいんだけどさ

「あらそう？じゃあお願い」

「あいよ」

彩綺 side 終

彩綺の母 side

彩綺はもうすっかりしすぎね。この年頃の子供なら、普通は手伝ってくれるなんて自分からは言わないでしょうね。何か寂しい感じもするけれど、立派に育ってくれば私はいいわ。しばらくは子離れ出来そうにないけども

「母さん、洗い物終わったよ」

いつの間にか彩綺が隣に居てそんな事を話してくる。結構長い時間考え込んだのね。取り敢えず

「ありがとうね、彩綺。貴女はもうお風呂に入ってきたさいな」

「はい」

さてと、それじゃ彩綺が居ない間に机拭いたり色々しましょうか。えっと布巾布巾

彩綺の母 side 終

再び彩綺 side

母さんに風呂入れて言われたし、さっさと入ってテレビ見よつと。何か面白いのやってるかなあ

入浴中

はあ、気持ちいい。疲れが溶けだすようだよ。のぼせないように

程々にしとかないとね

入浴後

ふう、気持ちよかった。お風呂の後はアレでしょ！

「母さん、アイスある？」

「あるわよ。1個にしときなさいね」

「分かってる分かってる」

よし、目的の物は手に入った。これを風呂上がり食べるのが止められないんだよなあ

「んー、美味し♪」

この後は髪を乾かして歯磨きしてもう寝ました。テレビを見る元気はありませんでしたね

入学式だけ

ええ、今日は小学校の入学式ですね。ちょっと前に買ってもらった新しい服を来て、今は式の最中です。はい、眠いです。校長先生とか町の偉い人とかの話が長いうえにつまらないときた。ああ、そうそう。緑谷くんや爆豪くんも一緒に小学校ですよ？恐らく中学校も同じにあるんでしょうねえ。そっちの方がいいんですけどね。：爆豪くんのあの態度はどうかと思うよ。足広げてるし、話してる人の事睨んでるし。中にはグース力寝てる人もチラホラと。私も寝ちやつていいかなあ？マジで眠くなるんだけど

「これを結びとし、私の挨拶は終わらせていただきます。新入生の児童の皆様。これからは勉学を学び、将来を考えて生活していきます。困った事や分からない事があつたら、先輩や先生に聞いてください」
やつと終わったよこの長い話。しかも新入生に伝える言葉じゃないだろうが。なんで勉学とかそんな難しい言葉使うんだよ。意味わかんない。でも、やつと終わる。さっさと帰ってゆつくりしたいんだから早く退場させろや。あんたらの話は新入生はほぼ誰も聞いてないぞ

「新入生が退場します。大きな拍手で送りしまよう」

はあ、やつと終わったよ全く。今回の人生ではこれほどまでにつまらない時間はなかったぞ。入園式の時ですらもうちよつと楽しかったぞ？まあいい。こうして終わったのだからなというか何か思考の言葉が悪い気がする。うーん、気のせいかな。さてと、家に帰ったらゴロゴロするぞー！

入学式も終わり家に到着

「母さん、この後何かあるの？」

母さんは今、何故か服装を出掛ける時の少し楽な格好に変えていた。そのため何かあるのかと聞いてみると

「ああ、彩綺。実はね、この後、貴女のクラスの子達とその保護者の皆が集まってご飯を食べるのよ。貴女も行くから、準備してらっしやい」

おお、そんなイベントがあつたのか。早速準備に取り掛かるとしよう

「ほーい」

あれ？個性使えば簡単なのでは？…まあいいや。ちゃんと準備しよう

準備完了。あとは母さんだけだ。そういえば爆豪くんは来るのかな？こういうのには来なさそうだけど

「お待たせ彩綺。じゃ、行きましようか」

お、やつと来た。え？父さん？入学式には来たけどその後仕事に行っちゃった。父さんのおかげで生活出来るし、何も言わないけどね。むしろ仕事を休んでまで来てくれたのだ。感謝しかしてない

食事会の会場に到着

おお、もう結構人がいるな。さて、緑谷くんは何処にいるかな？お、いたいた

「おーい、緑谷くーん」

「あ、彩綺ちゃん！」

「やあやあ、ところで爆豪くんも来てるのかい？」

取り敢えず気になっていたので聞いてみる事にした

「んー、どうだろう。いるのかな？」

まあ、いてもいなくても別に変わらんけどな。ていうか大人はもう酒飲んでんじゃねえか。気を付けろよ。ここには子供も居るんだからよ。

そして、えんかい食事会は幕を閉じた。途中二次会やろうとか大人達がい出すもんだから、ビツクリしたよ

登場人物の紹介

こちら辺でちょっと登場人物の紹介をします。私も把握出来てないので整理します。

霧雨彩綺

個性：コピー

自らが知っているキャラクターや人物の個性、能力、技などをコピーし、劣るとも勝らぬ威力でそれを使いこなす。初見でもその技はコピーする事が出来、まさにチート級の個性。その時に足りないものは主に魔力でカバーをしている。色々出来るけどやりたくない

性格：面倒くさがり屋、温厚

性格は面倒くさがり屋で基本的に温厚。たまにキレるがその時は最早鬼だ。ただの戦闘狂となる。相手が弱いと戦っている間に少し相手で遊び出す。そうなるともう手のつけようがない。恐らくだが、オールマイトでも敵わないかもしれない。それ程に強い。だが自分の事を弱いと思っている所もある

特徴：親に歯向かう事がなく素直

嫌いなもの：漬物、爬虫類の一部のもの、人を傷付けるようなやつ
好きなもの：可愛いもの、ゲーム

霧雨彩夜きりさめさや（彩綺の母）

個性：魔法

魔法を使う事が出来る。これは魔力を持つので簡単に使いこなす。だが普段は使わない。曰く使う必要がないようだ。あまりに強い個性なので1日に何度も使うとバテる。魔法なら何でも出来、火、水、木、などといった属性を完璧に使いこなす。魔法を組み合わせ、新たな魔法を作ること出来る。実際に既に幾つか作られている

性格：几帳面

性格は几帳面で、部屋どころか家は何時も綺麗。物が何処にあるかも把握していて、物を失くす事が滅多にないそう。これには家族全員感謝をしているそう

特徴：怒ると怖い、料理がとても上手い、器用
嫌いなもの：虐め、嘘つき、約束を破ること
好きなもの：家族、料理、裁縫

霧雨隆綺（彩綺の父）

個性：想像

想像したものをなんでも作り出せるというところでもない個性。生き物は例外。ただし創り出すものは大きさなどの制限はない。強力な個性故に、1日に2度使えるかどうかだという。それでも使えば何でも生み出すチート級の個性。使った後はかなり疲れるそう。だからなるべく使わない様子

性格：真面目、誠実、温厚

真面目な人で何時も仕事に打ち込んでいる。しかし家に帰らなかった日は出張以外では無く、彩綺の誕生日やクリスマスなど、イベントの際は早くに仕事を切り上げ帰ってくる。勿論プレゼントなんかも用意して。そして怒ることが滅多にない。何かを言われても、上司にどんな無茶振りをされてもそれを受け入れ、決して怒らない。唯一の例外は彩綺が友達に叩かれてしまった時のみだ

特徴：かなり高身長。髪は短くしている

嫌いなもの：家族を傷付けるやつ

好きなもの：家族

へドロ事件：前編

彩綺 side

さてと、今は前回から約9年経ち、UA高校の入試まで残り2ヶ月程となっている。最近では皆受験勉強だの個性強化だので慌ただし。え？私？私は何もしてないよ。受験勉強なんてしなくて、前世の記憶で受験はいけるだろうし、本当に分からなかったら大賢者を頼るよ

「解：それは自分の能力ではないかと思われませう」

いいんだよ、そんな事気にしなくても。私はなるべく楽しく生きていんだよ。だから使えるものはなんでも使うのさ。それが私だ！

「呆：そうですか」

呆れないでよ大賢者さんよ。貴女に呆れられたら私悲しいよ。そういうえびさ、大賢者って性別あるの？声は女の人みたいな声だけど

「解：私には性別はありません。世界の声の力の1片みたいに思っていただければ」

ふーん。世界の声ってあれだよな？転スラに出てくる魔王種が誕生した時とかに知らせてくれるアレ

「解：そうです。転スラというのがよく分かりませんが、世界の声については合っています」

ほほう、それはそれは大層な者ですね大賢者様？

キーンコーンカーンコーン

お、大賢者と話してたら授業終わってったわ。いやー、大賢者が居てくれてマジで助かるよ。話し相手になってくれるし分からない事は答えて教えてくれるし

「照：ありがとうございます。ですが勉強はやっておいて損は無いですよ？」

いいのいいの。そんな事は気にしないで。さてと、学校も終わったし、そろそろ家に帰ろうか。ん？あれ？緑谷くんが爆豪くんノート爆破された上に窓から捨てられてるじゃん。しかもそれを見てるだけだよ、他の奴らは。ま、虐めが終わったら帰るかな

「爆豪くんや、君は何時まで緑谷くんを苛めるつもりだい？そろそろ更生した方が良くぞ」

「うっせえよコピー女！俺に指図すんな！」

「指図じゃなくて注意だよ。君にはまだ負ける気はないからね」

このくらい煽っておけばイラついて帰るだろう。帰んなかったらそんな時はそんな時だ。個性使って家に送ろう

「き、霧雨さん。僕は大丈夫だから」

「いや、私がやりたくてやってんのさ。だから気にすんなよ」

あ、ちなみに霧雨さんって言うのは私の事だ。今まで下の名前しか出していなかったが、苗字は霧雨というんだ。まあそれはどうでもよくて

「爆豪くん、皆の前で無様な姿晒したくなかったらさっさと帰った方がいいぞ。さもなきや私はお前を強制送還する」

「ちっ！いつかお前も倒す！そんな時は覚えとけよ！」

「はいはい。頑張ってるねー」

ふう、やっと帰ったよ全く。どうしてあんなふうに弱いものいじめをするのだろうか。私には理解が出来ん

「緑谷くん、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫。霧雨さん、ありがとう」

大丈夫ならいいか。それよりも

「どういたしました。それより緑谷くん。昔みたいに下の名前で呼んでくれよ水臭い」

「え、あ、いや、その、下の名前で呼ぶのは恥ずかしいというか何と云うか」

ええ、今日からまた昔みたいに読んでもらおうと思ったのにー。でもまあ、嫌ならいいか

「そっか、残念。じゃ、一緒に帰ろうぜ」

「うん、ごめんね、霧雨さん」

その前にちゃんと緑谷くんのノートを拾っていくかな。何処にあるんだろう

「緑谷くん、帰る前にノートを拾っていいこうか。大事な物なんだろう？」

「うん！ありがとう！」

よし、そうと決まれば早速探そうか。見つかるといいな

校舎の裏にて

お、あったあった。良かったよ見つかった。じゃ、緑谷さんとオー
ルマイトが出会うように行動しながら帰るかね

へドロ事件：中編

彩綺 side

ええ、はい。今は緑谷さんと一緒に帰路へついているところです。私と緑谷くんは近所さんで、小さい頃からよくお互いの家へ行っては遊んだり話をしたものです。ああ、懐かしいなあ。今は女子に弱くなっちゃってしまったからね。家に呼んでも多分ガチガチで会話なんぞ出来やしないだろうな。それにしても、オールマイトは何処だろうか？あのへドロを追ってくるのだろうけど、イマイチ位置が分からない。まあ気にしなくていいや。なるようになるだろう

「なあなあ緑谷くん。爆豪くんとはどんな感じだい？」

「え？あ、えつと、一応前よりは上手くいってる、のかな？でも勇気さえあれば僕でもかっちゃんに反抗は出来そう」

お、意外と進んでたな。でも爆豪くんは緑谷くんの事が気に入らないのだろう。何せ、爆豪くんよりも強い私が鍛えているのだからな。そんじよそこらのやつには体術では負けないだろう

「そうかそうか。いやあ、それなら修行を付けている甲斐があったってもんよ」

「うん！それに関しては霧雨さんに凄く感謝しているんだ！ありがとう！」

「いやいや、これも私の自己満足さ。やりたくてやってるのだから、気にしなくていいよ」

これを言ったら偽善者だの何だのと罵られそうだが、実際そうなのだ。私は緑谷くんを鍛えたくて鍛えているのだ。緑谷くんには肉体を早めに完成させて、個性の練習をして欲しいからな

「それでもだよ！ありがとう、霧雨さん！」

「うん。そう言ってくれるのはありがたいよ」

まあ、ここまでお礼を言われたら、受け取るしかないよな。これで否定する程私は腐ってはいない

「あ、そうだ！この後、特訓を手伝ってくれないかな？相手がいる実践形式でやってみたいんだ」

おお、真面目やねえ。何かこの真面目さに付け込まれて誰かに悪用されないかな？それが心配だよ…

「いいよ。その代わり、本気で来ないと叩きのめすからね」

「うん！勿論本気で行くよ！」

そんな会話をしていたら…

「お？こんなところにガキが2人もいんじねえか。よし、お前ら！そこから動くなよ！動いたら殺すからね！」

とまあ、ヴィランがやって来た。しかも原作に出てくるヘドロだ野郎だった。人質として捕らえたつもりだろうけど、そう簡単には死なないからいいかなあ

「き、霧雨さん!?なんでそっちに?」

「大丈夫だよ、緑谷くん。私は死なないから」

よし、それじゃ個性使うかな。痛覚無効ともこたんの能力を使う。そうすりや痛みもないし怪我も直ぐに治る。後はオールマイトのワンフォーオールかな。これでいいだろう。ヴィランよ、覚悟しろよ？

「お前止まれ！死にてえのか！」

「死ぬ気はないよ。あ、そうだ。こいしの能力も使えばもっと有利になるじゃん」

なんでこんな事も忘れてたんだろう。ていうかこれだけ一斉にコピーしても反動が一切ない。本当にチートだよな

「ちーこうなったらー！」

「そうそう。君の個性は効かないよ。対策もしてるからね」

周りに結界を張っているだけだけど、何も無いよりマシだ。結構な強度だし。大賢者、あいつの弱点分かるか？

「解：ドロドロとしてるので物理的なダメージは効かない可能性があります。どうにかして捕らえるのが最適でしょう。まずは周りに付いているヘドロを吹き飛ばして下さい。その後はオートバトルモードへの変更をお願いします」

了解したよ大賢者さん。最初はやるけど後はよろしくね

「了：勿論です」

よし、バトルだ、ヘドロ野郎。行くぞ！

「スマーシューツシュ！おっしや！ヘドロが飛んだ！後は任せたぞ！大賢者さん！」

「了：はい。お任せ下さい」

おお、大賢者さんがヘドロ野郎をビンに閉じ込めてる。ん？ビンはどこにあったのかって？そりゃ勿論作ったのさ

「終わったー」

「私がー！来たー！ー！」

あ、オールマイトの登場だ。いや、ちよつと遅かったな

「オールマイト!?あの、サインを…もう書いてあるー!」

「君達かい?ヴィランを倒したのは」

「そうですよ。あ、はいこれ。さっきのヴィランを閉じ込めてる。」

ふう、これでは爆豪くんの救出かな。頑張ろ

彩綺 side 終

緑谷 side

「終わったー」

す、凄い！ものの数分でヴィランを倒しちゃったよ！やっぱり霧雨さんは強いなあ

「私がー！来たー！ー！」

オールマイト!?え、本物!?うわあー！ずっと会いたかったんだ！そうだ、サインサイン

「オールマイト!?あの、サインを…もう書いてあるー!」

早っ！いつの間にも!?

「君達かい?ヴィランを倒したのは」

正確には僕はただ見てただけなんだよね

「そうですよ。あ、はいこれ。さっきのヴィランを閉じ込めてる。」

「ご協力感謝する！それでは!」

あ、行っちゃった。聞きたい事があったのに

「緑谷くん、オールマイトの所に行きたいかい?連れてってあげるよ!」
そんな事が出来るのかな?でも、行きたい!

「お願い！霧雨さん！」

へドロ事件：後編

彩綺side

勢いで緑谷くんをオールマイトに会わせるなんて言っちゃったけど、何処にいるのかな？まあいいや。個性使えば1発だし。使うのは悟空の瞬間移動みたいなやつかな。それなら緑谷くんも一緒に行けるだろうし

「緑谷くん、手繋いで」

唯一の心配は緑谷くんが手を繋げるかどうかだなよね。緑谷くん、何度も言うけど女子に弱いし

「き、霧雨さん!?!なんで手を!?!」

なんでって言われてもなー。そういうものだからなー

「今からオールマイトの所に行くけどその時に緑谷くんは私の体のどこかを触ってなくちゃダメなんだよね。だから手」

「え、で、でも…」

ああもう焦れたい！勝手に繋いで行こうもう

「はあ、はい、行くよ」

「~~~~~／／／」

大賢者、どこの建物がオールマイトに近い？

「解：ここからおよそ1キロの所のビルの屋上です」

そうか、ありがと

「よし、行くぞ緑谷くん。置いてかれるなよ」

ビルに到着

うし、着いた。早く手を離さないと緑谷くんがヤバいかな

「緑谷くん、大丈夫かい？」

「うん。大丈夫」

「き、君達は！」

あ、近いじゃなくてここ自体に居たのね。なら探す手間が省けたよ
「やあオールマイト。この子があんたに話したい事があるんだとよ。聞いてやってくれ」

「あ、ああ。それくらいなら大歓迎さ！」

よし、後はマッスルフォームを解いてもらわないとな。この後にまたあいつが出てくるだろうから

「んじや緑谷くん、私は向こうに居るから何かあったら呼んでね」

「うん、ありがとう、霧雨さん」

さてと、盗み聞きはよくない。さっさと退散だ

彩綺side 終

緑谷side

しばらく話して色々分かった。オールマイトは5年前の戦いで傷を負って、ヒーローとしての活動時間に限りがあること。そして、で痩せ細ったような体が本当の姿だと言う。傷も見せてもらった。最後に今一番聞きたい事を聞こう

「あ、あの！個性が無くて、あなたみたいなヒーローになれますか！？」

「個性がない？少年、夢を見るのは大いに結構。だが、それ相応に現実を見なければな。ヒーローは何時だって命懸けなのだから」

僕はオールマイトなら僕の気持ちを理解して、言っただけじゃなかったセリフを言ってくれる、と、信じてそう聞いた。だけどオールマイトからの答えは、残酷にも僕を絶望へとたたき落とした

「それではな、少年」

と言って、オールマイトはヴィランが入ったピンを持ってどこかへ行ってしまった

緑谷side 終

再び彩綺side

緑谷くんが話しているうちに私は大賢者と話し、安全にすぐに下へ降りる方法を考えていた。そして出た結論は、飛べばいい。私が個性使って飛べば良かったのだ。簡単な事だった

「緑谷くん、そろそろ下へ降りようか」

「うん…」

この落ち込みよう、オールマイトに振られたか。まあ、誰でも自分はヒーローにはなれないと言われたら落ち込むわな。でも、帰らない訳にはいかない

「よつと」

今は降りる為に緑谷くんを持ち上げたのだが、軽かった。私がおかしいのか、緑谷くんは軽々と持ち上がった

「霧雨さん!?!降ろして!」

危ねえ。ジタバタされるとこつちまで危ないわ

「じつとしてろ!帰るからな」

「!うん」

よし、やっと暴れなくなつたよ。一瞬だけ殺気を出したからな

「おいしよ」

「え?霧雨さん、まさか、飛び降りr」

緑谷くんが言い終わる前に私は飛び降りた。緑谷くんが叫んでいるがやめて欲しい。耳が痛い

「よつと。下に着いたぞ緑谷くん」

「あ、ありがとう…」

大丈夫かこれ?何か危なっかしいけど

「じゃ、帰ろつか」

「うん」

原作で爆豪が襲われていた所の近くです

もうここまで来たか。およ?騒がしいな。恐らくアレだろうな

「なんか騒がしいね。言ってみようか」

「そうやね。気晴らしになればいいけど」

私は緑谷くんと爆豪くんが危なくなったら手を出して助けよう。

それまでは見てよつと

「かつちゃん!」

そう聞こえたと思ったら緑谷くんは既に走り出していた。やれやれ、怪我するなよ

「もう大丈夫！何故って？」

「私が来た！」

お、オールマイトの登場だ。やっと来たかこの野郎

何だかんだあつて緑谷くんはヒーロー達に叱られ、逆に爆豪くんは褒められた。そして帰り道

「私がー！来た！」

「オールマイト！どうしたんですか？」

私はいない方がいいな。でも気になるし、個性使って隠れてよ

そうして話は進み、

「君は、ヒーローになれる」

つとまあそんな感じで、緑谷くんがワンフォーオールの後継者に選ばれました。そのあと私は緑谷くんの特訓に付き合ったのでした

個性の譲渡

彩綺 side

前回、緑谷くんはオールマイイトに認められて、ワンフォーオールの後継者となりました。ここまでは原作と同じような感じで安心してるんだけど、保育園に通ってた頃から私は緑谷くんの事を鍛えてきた。勿論、自主トレも欠かさないでやっていた。つまり何が言いたいかというと、もうすぐで緑谷くんはワンフォーオールを受け継ぐ事が出来るのだ。1週間位とか言ってたかな。まあ、原作と変わってしまふのだ。でも、個性を練習する期間が長いのは悪い事ではないし、いかと思っっている。何かあったら私は責任を取らなければいけないから、何も起こさないでほしい

今は学校へ向かっているところで、たまたま緑谷くんを見つけた

「やあやあ緑谷くん、おはよう」

「あ、霧雨さん！おはよう！」

普段からこのくらいで接して欲しいね。普段は話しかけたらガツチガチになってるからね

「ああ、そうそう。昨日オールマイイトとどんな話してたの？」

「えっあ、いやあ、その、無個性なのに突っ込むなど」

嘘ではない。だがその後に緑谷くんが動いたからオールマイイトも動く事が出来たと褒めていたがな。しかし！私が聞きたいのはそんな事ではない！ワンフォーオールについてなのだ！言わない方がいいかとも思ったが、ここはもうそのまま聞こう！

「んー、じゃ、質問を変えるね。ワンフォーオールについてどんな話をした？」

率直過ぎるか？でも、今更気にしても後の祭りだ

「な、なんで？なんで霧雨さんが、ワ、ワンフォーオールについて知ってるの？」

驚きすぎだろ流石に。それに私は前世の記憶があるなんて言える訳がないじゃないか

「さーて、なんででしょうかね」

「も、もしかして聞いてた？あの話」

まあぶつちやけ聞いてたが、言って大丈夫なのだろうか：いや、言わないでおこう。打ち明ける時が来たら話そう

「さあね。どうだろう」

お、そろそろ学校だ。今日はずっと早く帰ったかな。さて、学校終わったら夜海浜公園に行って練習付き合おうかな

そこでオールマイトに問い詰められる事になるなんて、この時の私には知る由もなかった

学校が終わり放課後家にて

「んー、そろそろ時間もいい感じだし行くか。母さんに見つかると五月蠅いから、ドアから出ないで飛んでいこうつと。緑谷さんとオールマイト、居るかな？」

海浜公園に到着

お、いたいた。やってるやつてる。緑谷くんがオールマイトが乗った捨てられた家具を引っ張ってるよ。確かオールマイトって200キロ超えてたよな。よく引っ張れるな緑谷くん。：暇だし行く

「おーい！オールマイトー！緑谷くん！」

「君は、緑谷少年と一緒にいた、えーと？」

「霧雨彩綺です。緑谷くんとは幼馴染みしてます」

適当に挨拶を済ませたけど、緑谷くんが固まっちゃってる。取り敢えずこつちに意識を引き戻そう

「緑谷くん？起きろー」

「!!（。ㄩ。ハッ!!霧雨さん!?なんでここに?）」

「夜風に当たりたかったのだよ。んで散歩してたらまた見つけたからさ」

思いつきり嘘である。だって知ってたからなんて言ったらヤバイやつみたいだよ。いや、一応未来見る能力持ってるカリスマ（笑）のお嬢様が居たけど！その能力をコピーしたとして、信じてもらえるかは怪しいし

「そうなの？じゃあさ、僕の特訓付き合ってくれない？模擬戦みたいな感じでさ。昨日出来なかったし」

「いいよ。怪我するなよ？」

「勿論！」

バトル終了後

「お疲れ緑谷くん。明日からもここに来るから、特訓、付き合おうよ」

「ありがとうございます、霧雨さん」

そんな感じで、1週間とちよつと、私は緑谷くんの体作りを手伝いました。そして1週間とちよつと経った後

「おめでどう緑谷少年！これで個性を譲渡出来るよ！」

「ありがとうございます！」

「それで、個性を渡すのはどうやってやるの？」

まあ察しはついてる。ていうかこれは忘れられなかった

「簡単さー！さあ緑谷少年、喰え」

そう言つてオールマイトは緑谷くん髪を喰えと言ひ、緑谷くんは素直に食べた。こうして、緑谷くんはワンフォーオールを使い手となりました

試験当日!

彩綺 side

はい、今は自室で休んでいるところです。明日はUA高校の入学試験なので、そろそろ寝ようかと思っております。実を言うと、あまり緊張していないんですよ。逆にワクワクしてるのですよ。これっておかしいんですかね?でもまあ、私は私なりに頑張っていると思いますので、合格出来なかったら自分はその程度だったと言うことですからね、うん。まあ、明日は早起きして緑谷くんに喝を入れて来たいので、そろそろ寝ます。おやすみなさい

……何これ?私の分身体がめっちゃいるんだけど。は?意味わかんないよ。前にもこんな意味わかんない夢は見たけど、それ以上に異常な夢だな。しかも皆が性格が違ったりしてるんだけど。何だよこれ。明日は入学試験だつてのに、こんな意味わかんない夢を見たら気が散って仕方がないよ

数時間後…

「ん」

ふああ、よく寝たよく寝た。結局あの悪夢がなんなのかわからないまま、朝を迎えました。あの夢は、すぐに終わりました。でも取り敢えず、朝ごはん食べよつと

「母さん、おはよう」

「おはよう、彩綺。今日は早いわね」

リビングに行くと、キッチンに立つ母さんが居て、いつも通りの見慣れた光景。ただ1つ違うとすれば、

「おはよう、彩綺。今日は入学試験なんだつてな。頑張つて来いよ」

いつもは仕事が忙しくて朝早くに家を出てしまう父さんが家にいてくれるのだ。そしてめっちゃ寛いです。今日は仕事じゃないのかな?どうしたんだろう

「おはよ、父さん。今日はどうしたの?」

「娘の大事な入学試験なんだ。見送りたいと思うのはおかしいか？」

なんと！私の為に家にいてくれていたのだ！父さんが家で寛いでいるのはあまり見ないから新鮮。でも仕事はどうなんだろうか

「父さん、仕事は大丈夫なの？」

「ああ。大丈夫だ。今日は有給を取ったんだ」

父さんは有給を取ってまで私を見送ってくれるらしい！いつもは仕事で忙しいけど、父さんのおかげでこうして生活出来ているのだから、感謝しかないのに、今日は休みを作ってくれたという。正直に言うと、すつごく嬉しい！

「ありがとう、父さん！私が帰って来たら一緒にお話しようね！」

「勿論だ。頑張れよ」

父さんが応援してくれているのだ。下手な事は出来ない。っと母さんが蚊帳の外になってしまった。そろそろご飯も出来るだろう。食べよ

「母さん、ありがとうね」

「いいのよ。それよりも早く食べましょ。今日は早めに行くんでしょ？」

「うん！」

母さんは何でもお見通しして訳か。いやあ、参った参った

数十分後…

「それじゃ、母さん、父さん。行ってきます」

「行ってらっしゃい。頑張れ！」

ということとでUA高校の試験会場に行きます。その前に緑谷くんの家に行つて

「おはようございます。緑谷くん居ますか？」

ハイ

「あら、彩綺ちゃんじゃない。出久に何か用？」

「試験の前に話がしたくて」

「そうなの？出久ー！彩綺ちゃんが話をしたいってー！」

「霧雨さん！おはよう。どうしたの？」

お、出てきた出てきた

「おはよう、緑谷くん。今日は試験、頑張れよ！手を抜くことは絶対にしちゃダメだからな」

「勿論！よかつたらさ、一緒に行かない？僕もそろそろ行こうと思っ
てたしさ」

「じゃあ、一緒に行こうか」

試験会場に到着。え？道中の会話？つまらない世間話だよ

「じゃ、頑張ろつか」

「うん！」

そんな会話をしていたら試験が始まった。筆記試験は何事もなくク
リア出来た。実技試験の方は

「よつと、これで10体目つと。次はー」

とこんな風に、結構順調に進んでいます。途中で救出もしたりと、
ポイントは結構稼げているんじゃないかな？回復もしたりと大変だ
けどね。そんなこんなで試験は終わった。私は緑谷くんとは違う会
場だったんだ。だから緑谷くんがロボットをぶっ飛ばすとは見れ
なかった。見たかったけどなあ。試験の方はなかなか良かったと思
う。合格してたらいいな。帰ったら父さんと母さんと親子水入らず
の時間を過ごしました

「(?!、ω・?!)?ドヤア」

「ちよつ!何そのドヤ顔お!」

「先に行くぞお!頑張って追いついてみなあ!」

よし、じゃあ走るか

緑谷 side

「先に行くぞお!頑張って追いついてみなあ!」

何か、霧雨さんには敵わないなあ。この光景、僕と霧雨さんの差を示してるように感じる。よし、追いつけるように頑張ろう!

30分後

「ハア、ハア、ハア、速いね、霧雨さん」

結局負けちゃった。でもいつか!いつかは勝ってみせる!

「ハハッ!頑張れ!私はそんな一筋縄にはいかないぞ!」

え?か、考えが読まれてる...?どういうこと?

「私は思考を読み取ることが出来るんだ。呼吸が乱れてて話すのが辛そうだったからね、それで話そうと思ってさ」

「そうなの!?あ、もう大丈夫だよ、ありがとう」

「それは何より。じゃ、私は帰るよ。またね」

「うん、また!」

よし、僕も帰ろう。お母さんに心配かけたくないし

彩綺 side

ふう、疲れたな。ちよつと休もう

「あら、帰って来たの?おかえり。手を洗ってから寛ぎなさいな」

「はーい。てかなんでそんな大荷物?」

なんで買い物袋を3つも持っているんだ?

「今日はお父さんの誕生日よ、忘れてた?」

あ、そういえばそうだ。受験の結果で頭が一杯で忘れてた

「そうだったね、じゃ、準備手伝うよ」

「ええ、ありがとう。お願いするわ」

さーてと、手を洗ってから料理を始めるかな

通知が来た!!!

さてと、通知が来てないか見に行くかね。今日こそ来てくれ。もう結果が気になって夜しか眠れないよ。いや、それでいいんじゃない! ……何これ、何で私は自問自答をしているんだ? いやいよ私もおかしくなつたかな。あ

「つ、通知来てるー!」

「うるせえ! 近所迷惑考えろ!」

「はっ、すみませーん!」

怒られてしまった。しかもあのじ…人は結構根に持つから、会う度会う度ぐちぐち言われるんだろうなあ。はあ、UAからの通知を見る前にこんな気分悪くなるとは思わなかった。とりあえず母さんに報告しよう。今日は父さんも午後からいるらしいし、その時に父さんには報告しよう

「母さん、UAから通知来てたよ。結果見よ」

「ええ、そうね、早く見ましょ」

あれ意外と冷静。いや、興奮してるのか体が震えてる。って、こっちの方がヤバいじゃん!

「母さん震えてるけど大丈夫?」

「ええ、心配ないわ。それよりも早く結果を」

「ホントかなー。まあいいや」

さてさて、ご開帳ー! お、アニメで見たこの機械! うーんと、このボタンを押せばいいのかな? おわつ、ついた!

「私がい、画面の中に来たー! やあ霧雨少女。この前の試験の結果、待ち遠しかったかな? では早速結果発表だ! 筆記試験! これは全問正解の素晴らしい結果だ! どうやったらこんなにできるのか、不思議ではないね! 次は実技試験! こちらも優秀な成績を収め、なんと78点! 凄い! その一言に尽きる! お次は隠されたレスキューポイント! まるでこのシステムを知っているかのような完璧なる救護で82点! 文句なしの合格さ! さあ、ここが君のヒーローアカデミアだ!」

あ、消えた。取り敢えず長かったけど合格なのね? 順位はー、

はっ? いやいやいや、なんかの間違いじゃ!? 私が1位? そんなはずは無い! あー、ここに来て原作をぶっ壊してしまった。まさかの爆豪を越してしまうとは。ていうかレスキューポイントだけで爆豪の点数上回ってるじゃん! (爆豪の実技試験の点数は77点) はあ、やってしまったものは仕方ない。取り敢えず入学準備だけしちやうかな。それにしても、母さんが静かだな、どうしたんだろ

「母さん? 大丈夫?」

あれ? 気絶してる。極度の緊張状態が解けたからかな。そこまで緊張してたのなあ。取り敢えず寝室に運んで寝かせておこう

ピロリン! ピロリン!

ん? 誰からだ? 緑谷くん? どうしたんだろう

「もしもし? どうしたの?」

『あ、霧雨さん!? やったよ! 僕合格した! 霧雨さんも合格でしょ?』

「あ、ああ、勿論だ。緑谷くんも合格してて良かったよ。じゃ、また学校でね」

『うん! またね!』

び、びつくりしたあ。急に大声で話すもんだから耳がどうにかなるかと思った。取り敢えず明日は必要な物を買いに行くかな。フフツ、高校生活、一体どんなものになるかな

中学生ラストスパート

とある日の帰りの会の途中…

先生の話って結構長いよなあ。真面目な話はちゃんと聞くけど、聞かなくても困らないような内容の時はほとんど聞いてない。大賢者は簡潔にまとめしてくれるから楽でいいよ

「呆…つまらなくてもちやんと聞いていてください。聞いていなくて困るのはあなたですよ」

うーん、頭ではわかっていても聞きたくないんだよねえ。一応聞こえてるっちゃ聞こえてるし、私に関係ある事だけ聞いとくよ

「最後に、霧雨、爆豪、緑谷は校長室に行け。校長が待っている」

校長室？あれ、なんかやらかしたつけ私。ま、いいや。行けばわかる事だし

校長室にて

コンコン

「失礼します」

校長室ってあんまし入った事ないからちよつと緊張するんだよなあ。それにしても何の用だろう

「よく来てくれたね。それじゃあ、話をするでしょうか」

やっぱり話か。何かやらかしたっていう話じゃなきやいいんだけど

「我が校から3人もの雄英高校の合格者が出て嬉しい限りだ。高校生活は今よりもっと大変だろう。それが雄英のようなエリート校であれば尚更な。しかし、私は君らが頑張る事を期待している。それでは、もう帰っていいぞ。気をつけて帰りなさい」

何だそれか。まあ、どつちでもいいし、さっさと帰らせてもらおう。

あー、そういやこの後爆豪くんが緑谷くんを苛めるんだっけか？うーむ、止めるか否か。どうしよっかなあ。止めたら原作と変わっちゃうしな。あ、いやもう結構変わってるし気にしなくていいかな、うん。よし、止めよう

「てめえが雄英に合格出来るなんてどんな手使ったんだ!?! ああ!?!」

お、やってるやってる。さてと、止めるかね

「爆豪くんやめな。そんな事言っただって結果は変わらないんだから」

「ああ!?! うっせえよクソコピーが! お前は黙って帰ってりやいいんだよ!?!」

ピキッ

こいつ…、もういい、ぶっ倒して強制的に帰す

「そうかい…。分かった、君をぶん殴ってから帰るよ」

『!』ゾクッ

シユッ

「チッ、上等じゃゴラア!!! かかってこいやあ!」

右に避けて、殴る

ドガン!

「当たるわけないだろう爆豪くん」

「うっせえわ当たr」

ドガン!!!!

「カハッ」↑地面にのめり込んでる爆豪くん

はあ、たつくもう。さてと、帰すかね

「じゃあね、爆豪くん」

よし、送還完了。緑谷くんはどこに行っ

「お、おい大丈夫か?」

な、何で何もしてないのに失神してるんだよ。はあ、緑谷くんも個性使って帰すかね。ついでに私も個性使って帰ろ

よし、着いた。さてと、今日はちと寝るかな。ふあーあ、眠っ

雄英に行くぜ！

今日はいよいよ雄英に入学する日だ！もう正直に言うと、めっちゃワクワクしてる！今はまだ5時にもなってないんだけどね、目が覚めちゃったのだよ。で、暇だから携帯をいじってるのですけどね、ふと気になったジェントルクリミナルの動画を見てみようと思ったのだよ。そしたらなんか、面白い程につまらん。犯罪なんぞの動画を上げてるなんになるのだろうか。まあ、その後2度寝しようと思ったのだよ、睡眠用のBGMかけてな。まあすぐに寝れたよ意外と。起きたのは1時間後で、丁度いい感じだったし下に行ったら母さんが居て、

「おはよー」

と声をかけても返してこない。どうしたんだろうと思って顔を覗いてみると、座ったまま寝ていた。器用だな…。自分で朝ごはん作ろうと思ってキッチンに行ったら母さんが何故か起きてきたんだよね。どういふことだってばよ…

「（。▽。）ハッ！おはよう彩綺」

どうやら寝ながら来たようだ。ものすごく器用な人！！

「おはよ、母さん。私学校に行く支度してくるね」

「ええ、分かったわ」

さてと、支度支度ー

10分後

よし、こんなもんかな？制服は汚しちや困るしまだいいや。さてと、下に戻る

「あら、遅かったわね。もう準備出来てるわよ」

「はーい」

さっさと食べてちよつと早めに行こ

「おはよう」

「おはよ、父さん」

やっぱりいたな父さん。最近はこういう時にいるのがお約束に

なってるもんなあ。まあ嬉しいけど

「ご馳走様。じゃ、ちよつと準備残ってるからしてくるね」

え、食べるの早い？さつさと食べると言ったジャマイカ。まあ支度するかな

しばらくして

「じゃあ行ってくる」

「ええ、行つてらっしゃい。帰ってきたらどんな感じだったか教えてね」

「はい」

よし、行こう。雄英は向こうだよな。ちよつとゆっくり行くかな。ん？なんか血の匂いがする。行つてみるか

パチン↑指パッチンの音

「た、助けてくれえ」

「カツカツカツ、こんな所には誰も来ねえよ。安心しな、すぐに楽しんでやるからよ」

あー、ヴィランかよ。倒してから登校するか

「おいそこのヴィラン。その人を攻撃するのはやめなさい」

「あー？なんだこのヒーロー気取りのガキが。止められるもんなら止めてみるよ」

「なら仕方ない。刑務所で後悔してろ」

「は？何言つてんだてめえ（笑）」

うっせえわこの悪者！

パチン

さてと、止まった時間の中で紙にメモ書いてコイツに貼つてつと。

よし、これでいい

「じゃあな」

グワン

空間を歪ませワープをさせる。ちよつときついがまあいいや

「待てこのgg」

よし、OK。さてと、さっきの人はつと

「ちよつと待つてください、今手当しますから」

「こんなもんかな？傷を治しただけで血の量は増えてないし、気をつけてもらわないとな」

「傷を治しただけで血は多少減っているので気をつけてくださいね」

「あ、ああ、ありがとう」

よし、気を取り直して、雄英に向かって出発だ

雄英に入学！

よし、到着つと。うわあー、でっけえなあ。取り敢えず1―Aの教室に行くかな

扉もでっけえ！アニメで見てたけどヤバいなこの大きさは。流石エリート校。お金のかけ方が違う。皆が来るの待ってるか

数分後

「お、もう誰かいんじやん！おっす！俺切島鋭児郎。よろしくな」

「私は芦戸三奈！よろしくね！」

お、この2人か。よく初対面の人に気軽に話しかけられるわ。逆に尊敬するよ

「私は霧雨彩綺。よろしく、切島、芦戸」

「霧雨…。確か1位で入学してきた奴じやなかったか？」

「そうだよ。まさかの1位通過だったけどね」

ていうかよく知ってるな。私は他の人の順位なんぞ知らんぞ？

「へ〜！凄いね！」

「なあなあ、お前個性なんなんだ？同じ会場にいたから見たんだけどよ、複数の個性持ちだったりするの？」

「いや、私の個性はコピー。見た事のある個性をコピー出来るんだ」

「何それチートじゃん！」

チートねえ…。昔から皆に言われ続けてきたな。うちの家族は皆チートだけど

「ははは、よく言われるよ」

お？また誰かが来たようだな。足音が聞こえる

「おーっす。既に3人いたか」

「ちよつと上鳴、誰もいなかったら超恥ずいじゃんそれ」

次はこの2人組か。幼なじみは一緒に来るもんなのかねえ

「まあまあ耳郎、落ち着けて。俺は上鳴電気、よろしくう！」

パ、パリピだなー。でもま、これでこそ上鳴電気って感じだ

「はあ…。うちは耳郎響香。よろしく」

「俺は切島鋭児郎だ。よろしくな」

「私は芦戸三奈！よろしく！」

「私霧雨彩綺。よろしく」

こんな感じでどんどん来る1-Aの生徒達に自己紹介をして、ホームルームスタート。相澤先生の寝袋に入った姿、久しぶりに見たよ。あ、ちなみに私の席は切島の後ろだぜ

「俺は相澤消太。君達の担任だ。よろしくね。早速だが、これを来てグラウンドに集合しろ」

あれは体操服か。よし、本気でやるかな

「せんせー、ここで何するんすかー？」

「お前等もやっただろう個性使用禁止の体力把握テスト。今回は個性を存分に使ってもいいそれだ」

「ええ!?じゃあ入学式は!?ガイダンスは!?」

「そんなもんは無い。時間は有限だと言っただろう。ヒーローになる上では必要ない事だ」

あ、あはは、やっぱり手厳しいね相澤先生

「まず霧雨、お前、中学ん時のボール投げの記録、幾つだった？」

「50ちよつとですよ」

「そうか。なら、個性使ってやってみろ」

よし来た。さーてと、やるかあ！

「円からでなけりや何してもいい」

「はーい。よつとー！」

ヒュー！

風を切るような音を響かせて飛んで行ったボール。やったのは力を増幅させて無重力にしただけ。簡単な事だ

「無、無限!?すげえ」

「面白そうー！」

ありや、やっぱ言っちゃまうか

「面白そう、か。よし、なら最下位は除籍処分にする」

『ええええええええええええええええええ!?!』

こうして、体力把握テストがスタートしたのだった…

個性把握テストの結果とその後

私の記録をどんどんまとめよう

50メートル走：1秒かからずの好記録

幅跳び：空を飛ぶ事で無限判定になった

握力：握力計がぶっ壊れてしまい記録は計れず

反復横跳び：まあこれは使えるの少ないし112回だったね。基礎運動能力を底上げた結果がこれだけ

ボール投げ：麗日のゼログラビティで重さをなくし、怪力を使ってボールをぶん投げた。まあ手本としてやった時と全く同じだね。これも無限さ

上体起こし：これは出来ることがないからそのままやった。記録は61まあ納得はいくね

長座体前屈：これまたおかしな事に腕を伸ばせばいいのでね、それをやったら63メートルまでいけた。それ以上伸ばそうとしたら腕が軽く切れた

持久走：これは皆に見えるギリギリのスピードで飛んだ。記録は1分ちよつとくらい。まあ早い方：なのかな？

こんな感じでエグい記録を生み出しまくった。途中からクラスメイトに軽く引かれていた。悲しみの極みだよ。で緑谷くんの怪我を治したんだけどねー、うまく治らなくて中途半端になっちゃったんだよ。骨は治ったんだけど腫れが引かなくてねー。結局リカバリーガールのところに行ってた。面目ない。今は帰ってる途中。緑谷くんが仲良くなった飯田と麗日の2人と私と緑谷くんが帰ってるんだ
「あ、そうそう、霧雨くんに1つ質問してもいいかな？」

「ん？あぁいいよ。何だい（*・ω・）？」

「緑谷くんと爆豪くんにはくんを付けているのに他の人は呼び捨てなのは何故なんだ？」

あ、確かに。意識してなかったからわからなかったけど、2人だけくん付けなのは確かにおかしいか

「ん、まあ昔つからその呼び方できたからねえ。今更変えることはできないのさ。それに、高校生で知り合った人にくんとかちやんとかつける気にはならなくてねえ」

「そうなのか。なら3人は幼馴染って事だな？」

「そ。まあ爆豪くんが緑谷くん個性が無いと思ってるのは、気にしないです」

「ああ、分かった。麗日くんも、それでいいな？」

「うん！というか私にはそれよりもっと気になることがあるんだけど…」

何だろう。他には特に何も気になることは無いだろうけどな。うーん、まあ聞けばわかるさ！

「ん？」

「何でデクくんは抱えられてるわけ!?!」

ん、ああこれか。いやあ、なんでだったかなあ。私も無意識にやってたしよく分からんだよなあ。まあ一つ挙げるとすれば

「怪我人だから、以上。そしてこのまま気絶してるから降ろすに降ろせない」

「あ、あはは、な、なるほど?」

うーん、起きなかつたら個性使って送ってくかねえ。やれやれ、世話の焼ける幼馴染だな

戦闘訓練

次の授業はヒーロー基礎学、か。オールマイトのあれかなあ

「私がー！普通にドアから、来たー！」

「オールマイトおお！すげえ、マジで教師やってたんだ！」

やっぱり凄い人気だなオールマイト。まあ現ナンバーワンヒーローだし、当然っっちゃ当然か

「私の教える科目はズバリこれ！ヒーロー基礎学！さあ少年少女！今すぐコスチュームに着替えて訓練場Bに集合だ！」

着替え中、更衣室にて…

「ねえねえ彩綺ちゃんのコスチュームってどんな感じなの？」

どんな感じねえ。そこまで特別なもんじゃないんだけどなあ。まあ耐熱効果のある生地を使ってもらってるからそこそこ特別かもしんないけどねえ

「別に普通だよ。動きやすいようにはしてもらってるけどねえ」

なんて言えばいいかな。うーん、東方Projectのパルスィの服が1番似てるかな。まんまそれって言う訳でもないけど、うーん、分かんない

訓練場では訓練の前に組み分けをした。えー、1人余るからという理由で何故か

「ではよろしくな、霧雨少女」

オールマイトと戦うことになってしまった。うう、惨めな姿を晒さないように気をつけないと

そしてラスト、私の番！え？他の人達の戦い？そんなんさ、作者が書けるわけないじゃないか

「さて、本気でかかってきなさい、霧雨少女」

「じゃあ遠慮なく行きますよ、オールマイト!!」

強く地面を踏み込み両者一斉に襲いかかる。1度拳同士がぶつかりあった後、激しい打ち合いが始まった。2人共あちこちに傷を作り、私は偶に血を吐く結果となった。その後私は上空へと飛び上がり、スペルカードを使つて攻撃した

「恋符『マスタースパーク』!」

魔理沙の十八番であるこの火力が凄まじいレーザーもオールマイトは避けてくる。しかし私は攻撃を仕掛け続ける

「禁忌『かごめかごめ』!」

飛べないオールマイトにこの弾幕はかなり有効だろう。そう思ったが普通に避けてきた。全く、化け物じみた人だよ

「じゃあ、これならどうだ! 暗黒の雪:改!」

七つの大罪に出てくる触ったら死ぬ雪を改造したものだ。触つてもダメージが多少行くだけで死にはしない

「何!? これ全てを避けるのはキツいな...! だが! smash!!」

す、凄っ! 一瞬で全部消し飛んだよ。ふふ、こりや勝てないねえ

「もういいよ、降参降参。いやあ、久しぶりにこんな本気でやったよ。やっぱり強いっすねオールマイト」

「こ、これは凄い。高校生の頃からこれだけ戦えていれば、きっと強いヒーローになるさ」

「ありがとうございます。いつかまたやりましょ。その時は絶対勝ちますから」

「ああ、楽しみにしてるよ」

この後私もリカバリーガールの所へ行かされそうになったが、自分で傷を治して無事解放された

個性の強化

前回オールマイトに負けてから数日の時間が経過した頃。私は、個性を使い、誰もいない空間に来ていた。ここでその力を物凄く上手く使っているアニメのキャラクターを呼び出し、修行しようと思う。先ずは炎をやるうと思う。実はな、私は炎が少々苦手なんだ。見たりするのはいいんだが、使うとなると上手く出来なくてなあ。だからこの人を呼んだ！それは…

「なあ、ここは一体何処なんだ？」

「ここは私が作り出した空間。あなたには炎の操り方を教えてもらいたいのです」

フェアリーテイルに出てくるナツだ！火竜という親を持つ人間で、炎を操って攻撃をする。これがカツコイイんだよ！皆も見えてみな！見てないなら！

「へ〜！そうか！じゃあまずは俺の真似をしてみろ！」

「ああ、分かった!!」

「火竜の…咆哮ー!!!」

うわ、すげえ威力。こりやくらったらひとたまりもないな。よし、やってみるか！

「ボーーーーー!!!」

で、出来た！声出でないのは気にしないで欲しいな。流石にアレを叫ぶのは抵抗が…

「おお！出来んじゃねえか！よし、なら次はこれを…」

こうして、私はナツに修行をつけてもらって行く。これ意外と疲れるんだよ？しかもナツはコツを教えたりするのは苦手っぽいからね、動きとかをしつかりよく見て真似するしかない。大変だった。けど、3時間程度で終わった。ナツは帰って行ったが、また来たいなどと言っていた。もしかしたらまた呼ぶかもしれないな。よし、戻るか

「よつと」

ん？んんん？ど、何処だここ。あれえ？おつかしいなあ。家の前

に行くはずだったのになあ。個性の誤作動？うーん、まあよく分かんないし取り敢えず探索探索く

「あれは…」

エンデヴァアの事務所？え、何でこんなところに!?まあいいや、取り敢えず助けてもらおう

コンコン

ガチャ

「誰だ？」

あ、やっぱりエンデヴァアの事務所だ。エンデヴァア出てきた

「誰だお前は。何か用か」

「あ、あの、個性の誤作動でここに来てしまったんです。帰り方を教えてくださいませんか？」

「個性？だったらその個性を使って帰ればいいだろう。さっさと行け」

あ、確かにそうだなあ。よし、また失敗するかもしれんけどやってみるか

「ありがとうございます」

バタン

うし、帰ろう

よつと。あ、帰ってこれた。よかつたあ

「ただいまあ」

「あらおかえり。遅かったわね」

「うん、ちよつと迷ってね」

「あらあら」

うーん、もう4時になっちゃったよ。よし、汗かいたしシャワー浴びよう

「母さんシャワー浴びてくる」

「はいはい。行ってらっしゃい」

さてと、シャワー浴びた後は何するかなあ。まずはアイスを食べたい。よしその方向でいこう

学級委員決めます

よし、学校行くか

「行つてきまーす」

うーん、なーんか暇つていうか刺激が足りないっていうか。雄英が結構面白いとこだからね、こういう時間がものすごく暇

繋げられる気がないのでカット！

「ん？何かいっぱいいる」

て、うわあこつち来たあ！あれ絶対マスゴミだろ！ヤダヤダ質問とか答えたくない！

「君！オールマイトの授業はどんな感じ？」

ええい！こつなつたら自棄だ！

「いい先生だと思えますよ。まあ1回目の授業でオールマイトと戦わされたのはアレでしたが。じゃあ退いてください。私は学校に来たのであってあなた達の質問に答えに来たのでは無いのですよ」

よし、行くか

「ちよ、ちよつと待つて」

あれ緑谷くんがいる。よし、一緒に連れて行こうかな
「ギャツ」

急に後ろから掴んだからか変な声が出ている

「ちよ、ちよつと！」

マスゴミが私達を追いかけて雄英の敷地内に入ろうとしてきた。しかし有名な雄英バリアによって邪魔をされていた

「さて、行こうか緑谷くん」

「あ、うん」

時は経ち朝の会の時間

「えー、学級委員を決めてもらいます」

『学校っぽいノキター。(。▽。)—!』

学級委員ね、確か緑谷くんと八百万が選ばれるけど緑谷くんは飯田と交換するんだったよな

「素早く決まるのであれば何でもいい。さっさと決めろ」

うーん、何か皆手を挙げててよくわかんなくなってきた。別にいいか、結局あの展開になるんだし幾らか早くても

「ほい皆！紙を配るから誰が1番やった方がいいか書いてくれ」

配り終わった。さてと、見てみますかね

緑谷3票

霧雨3票

八百万2票

・
・
・

以下略

な、何で私!?!いやいやいやそんなん出来る器じゃないし八百万にパスしたい!

「よ、よろしくね、霧雨さん」

「あ、ああ、うん」

あー!やつは無理!八百万と変わろう

「八百万、パス。私には無理だわ」

「ええ!?!そ、そんな。皆さんからの投票の結果をねじ曲げてしまうなんて…」

「いや私が学級委員なんてやったらこのクラス終わるよ?」

「わ、分かりましたわ。霧雨さんの代わりに努めさせていただきますわ」

よし、これでいい。あとは緑谷くんの方だがまあなるようになるさ。こればかりは任せておこう

昼時になつて…

さてと、昼は何食べつかなあ

「あ、いたいた！霧雨さん！一緒にお昼にしよう！」

ん？あれは緑谷くんと麗日と飯田か？何でまた私の所に。面白いことなんてないと思うけどなあ。え？友達だから？そりやどうも

「いいよ、一緒に食べよつか」

うーん、無難にカレーにするかなあ

しばらくすると

「警戒レベル4！警戒レベル4！」

あ、ようやくと来た。よし、私はここで成り行きを見させてもらうかな。あ、飯田が出てきた。あれさ、壁にぶつかって痛くないのかね

飯田によつてこの騒動は収まり、無事緑谷くんから飯田へと学級委員長が明け渡されましたとき

USSJ 襲撃

今はUSSJと呼ばれる建物に向かっているところだ。取り敢えずあれだろ？ヴィラン連合が来る日だろ？まあ死なないように頑張る

到着!!

13号先生の話が始まった。麗日がファンのヒーローだ。話がちよつと長いからカットな

「皆下がれ！個性の使用は俺が許可する！だがあくまでも自分の身を守るためだ！13号、生徒達を頼む」

そう言つて相澤先生、もといイレイザーヘッドが1人で突っ込んで行った。さてと、私も行こうかなあ。いや、こっちで皆を守ろう

「私の役目はあなた達を散らすこと」

何か言いながら黒霧が私達の中のほとんどをバラバラにした。勿論私は逃げたよ。あんなんくらつてる場合じゃないもん

「爆豪くん切島！突っ込むならちゃんと考えてから突っ込め!!他の人は私と13号先生の後ろで待機！」

皆に指示を出して13号先生のちよつと斜め後ろに行く。爆豪くんと切島は驚いた顔してたけどその直後に突っ込んで行った

「13号先生、後ろに気をつけて」

「は、はあ。しかし何故あの2人を行かせたんです？それがなければ私の個性で倒せたのに」

「そんな事したらあの人が死んじゃうじゃないですか。あの人一応実体ありますからね」

「だとしてもこのまま見てるだけではダメです。2人共退きなさい！」

そう言つて13号先生は個性を使い始めたしかしやはりと言うべきか、後ろにワープゲートを作られて自分の個性で傷を負った。しかし原作程では無い。すぐに分身に助けに行かせた。それでも戦闘は不可能に近い傷を負っていた

「13号先生下がって。全員で守って！」

そう言っつて私は黒霧の胴体を押さえつける

「爆豪くん！ここ抑えておけば動けないから抑えておいて！」

私はその後相澤先生の所に向かった。加勢をするためだ。しかし目に入ったのは突っ込もうとしてみる緑谷くんだった。私はマズいと判断しその前に立ち塞がった

「緑谷くん余計なことをするな！あの異形は緑谷くんよりもかなり強い！君が入っても怪我をするだけだ！運が悪けりや死ぬ！ここで見てろ！」

私が初めて怒鳴ったからか口を開けたままこつちを見ている緑谷くんだったが、私の言っている意味が分かったようで、急に心配そうな顔になった

「き、霧雨さんこそ危険だよ」

「何、私がやるのはヒーローが来るまで。そつから先はアシストに回るさ」

緑谷くんはまだ何か言いたげだったが、私は無視をして脳無に向かつて行つた

彩綺side終

緑谷side

「彩綺ちゃん大丈夫かしら」

あす、梅雨ちゃんがそう聞いてくる。僕自身心配だったが、こう答えるしか無かつた

「きつと大丈夫だよ。霧雨さんはこんなところで死んだりしないよ」

「そう、よね。うん、信じて見守るわ」

「クソツ、ヒーローは何してんだよ！早く来いよ！」

峰田くんの声は少し小さかつたけど、確かにそう言っていた。霧雨さん、絶対に生き続けて

し、死ぬかと思った

さてと、脳無の相手、か。こりや大変なお仕事だよ全く。しかも誰も来ないようにしながら相澤先生守らないといけないし。あー、出来るかなー。いや、出来る出来ないじゃなくてやんなきゃみんなが死ぬ！いつかオールマイトが来る！それまで耐えないと！

「ほら脳無。私が相手だ。かかってこいよ」

「|| (・□・) <キエアアアエエエアアアアアアアアアアア」

うわ、すげえ顔にすげえ声。取り敢えず、死なない程度に頑張ろ

「おら行くぞお！」シュツツ!!!

「キヤアアアエエエエエ」

うつき。マジでうつきいやんこれ。耳がおかしなるわ

ドゴン!!!

ここから、私と脳無の殴り合いが始まる。2人共個性で回復が出来、フルパワーでやってる。でも、フルパワーを超えていかないと勝てない。オールマイトの100%の力に耐えられるように作られてるんだ。私の中途半端な攻撃が効くわけがない。だけど諦めない。ワンフオーオール、そして勇儀の怪力の力。全部出して戦うことにする

「チツ、!!クツソがああああああああああああああ!!!」
ドン!!!!!!

もの!!ごく重い音がして、私は脳無を真上に打ち上げた。そして数秒後、脳無は上から落ちてきて、私は世界一硬い金属を使った枷で手足を封じ込め、かなり硬い縄でグルグル巻にした。そして死柄木弔の方へ向かい直り、飛び出した勢いのままその顔面にパンチをいれた。手がいくつ飛んで行ったが知ったこっちゃない。こちとらこいつのせいで超疲れたんだよ。殴るくらいいいだろ

「死柄木弔あ、お前のせいで余計な血が流れてんだよオ。殴ってもいいよなあ?」

「ああ?何言ってるんだお前。黒霧!帰るぞ!...おい黒霧!」

「無駄さ、私の信頼できる仲間たちが抑えてくれてるからな」

はあ、疲れたあ。取り敢えず、オールマイトがそろそろ来るだろうし、ちゃんと説明しなきゃなあ。メンドイ…

「は？チツ、何なんだよお前」

「ん？どこにでも居るヒーローに憧れる学生だよ。名前は名乗る気はない」

「はあ？お前ふざけてんのか。俺のこの手がお前に少しでも触れれば、お前はそこから崩れるんだぞ。発言に気をつけた方がいいんじゃないか？」

「ははは、知ってるさ、それくらい。お前の個性も、お前の名前も。私の個性によつてな」

こいつ、さつき私が死柄木吊つて名前を言ったの覚えてないのか？分かってないんだろうな、驚いているんだし

「チツ、ならもういい。黒霧も捕まってる事だ。助けに行かねえとなあ？」

行かせると思ってたのかねえ。しかも、ここでオールマイトきたし。この人達終わったな

「霧雨少女！そのヴィランは一体？」

「こいつは脳無って言って、この人があなた用に連れてきた、まあ兵器のようなものです」

さてと、オールマイトも来たことだし、私は黒霧の方に行ってくるか

「じゃあこの人をお願いしますね」

んー、多分今頃逃げられてる頃なんだろうな。抑えても個性は使えるしな

「よつ、調子はどうだい？」

「見て分かんないのか！今こいつを抑えようとして必死なんだよ!!」

はあ、やっぱりか。しかも私はさつきので本気出せなくなってるし。取り敢えず抑えるだけ抑えるか。相澤先生、個性借りるよ

「む、個性が使えない？そうか、お前か」

「つたくもう。良かったな逃げられなくて。ん？」

ヒュッ!!

何だ、あれ。なんか飛んできたんだけど

「お姉さん、黒霧を離してよ。じゃないと、殺しちゃうよ?」

いや、ウツソだろお前。脳無より強いんだけど…。ふざけてんのか
私にそんな力残ってないわ!!!しかもこの姿って、やっぱりあいつか
?!!!!!!

○○との対戦！

何で、ヒロアカの世界にこいつがいるんだ？『フランドール・スカーレット』東方Projectに登場する、スカーレットデビルであるレミリアの妹で、悪魔の妹と呼ばれる吸血鬼だ。まさかこんな所で会うことになるとはなあ。それにしても、何で居るんだろ

「君はフランドール・スカーレットだね？」

「…お姉さん、何でフランの名前知ってるの…？」

あらら、更に警戒されちった。こりや突破は難しいぞー。どうすっかなあ

「別に、知ってるから知ってるのさ。さてと、君のお姉さんや他の家族はどうしたんだい？」

「フフフツ！アハツハツハツハツハツハツハ。みんな壊したんだよ！お姉様も！咲夜も！美鈴も小悪魔もパチュリーも！他の妖精メイドだって！皆皆、フランが壊したんだ！」

え、な、泣いてる？へっ？な、何故？んー、心ん中見てみればわかるかな

「（本当は壊したくなんかなかった…！あの時、フランが衝動を抑えられれば、皆は…!!）」

あー、後悔の念がかなり積み重なって心の闇と化してるんだなあ。ん？闇？闇ならルーミアの能力使えば何とかかなるんじゃないやね？確か闇を操る程度の能力だったし

「…。フラン、今から君の心の中の闇を取り除く。家族の事は気の毒だけど、思い出と共に生きていきな」

さてと、出来るかなー。ほっと

「あぐっ」

うお！結構大変だこれ。フランの心の中に闇が食いつきすぎてて離れない。どうするか。取り敢えず引っ張り続けるか

「フラン！楽しかった思い出を頭の中に1杯に広げろ！そうして心の中に光を作るんだ！」

「わ、分かった…！うっ」

お、少し緩んだ。よし、今の内にさきつと引つ張り出すか

「一気にいくぞ！その場で踏ん張れよ！」

そして思いつきり引つ張ったら、黒い物体というかなんというか、そんなのが出てきた。正直気持ち悪い。動いてるし。その動きが気持ち悪い

「ハアっハアっハアっハアっハアっハアっハアっハアっハアっ」

「お疲れ様、フラン。皆との思い出、大切にな」

「う、うん。……………」

あれ？また泣き始めちゃった？でも今回は普通に家族の死を受け入れて流す悲しみの涙だな。さてと、どうすつか

「大丈夫だ。何ならうちに来るか？母さんもきつといいつて言うさ」

「…！ありがと！お姉ちゃん！」

可愛い！憧れのお姉さん予呼び！しかも推しキャラの一人に言ってもらえるなんて、すげえ嬉しいんだが

「うん、どういたしまして。おいで」

軽っ！え、何この子ちゃんと食べてる?!軽すぎるんだが…

「……………さっきの話だけど、迷惑にならないなら、行きたい」

こうして、我が家にはフランドールという妹が出来た。両親は2人共許してくれたし、良かったよ。実はあの後、私はこっぴどく怒られた。まだ学生なんだから、無茶をするな、と。しょうがないよね！目の前で人が襲われるところなんて見たくないもん

久しぶりのゆったりした休日

えー、今日はUSJ襲撃から数日経ったある日。今日は休日の為、いつも通り散歩に出かけようと思う。で、フランを連れていこうかどうしようかで今は悩んでるんだ。フランは吸血鬼だから、太陽がダメだし、かと言って家に日傘がある訳でもないし…。フランは行きたがってるんだけどなあ。あ、そうだ

「フラン、能力で弱点を破壊出来ないの？」

「んー、無理かなあ。昔やろうとしたんだけど出来なかつたんだ」

そっかあ、フランに破壊は出来ないのかあ。ん？じゃあ私がやるのは出来るのかな

「よし、ドカン」

あ、出来た。意外と簡単にできたわ

「フラン、弱点破壊出来たし行こ」

「え、本当!?!やったあ!!行こ行こー」

んー、可愛い。いやあ、この元気にはついていけないが、見守ってる分には微笑ましいというかなんというか

「ちよつと落ち着きなよ。そんなに慌てなくても、私は逃げはしないさ」

「でも時間は無くなるじゃん！」

「まあ、それもそうだね。じゃ、行こっか」

「うん！」

元気だなあ。家族を亡くした子供だとは思えないよ

「ねえねえ、散歩って言っても何処に行くの？」

「ん？ああ、特に決めてないよ。自由に、体の赴くままに歩くのが楽しいのさ」

「ふーん。ならば、行ってみたいところがあるんだけど、良い？」

行ってみたいところ？はて、どこだろう

「別にいいけど、何処に行きたいの?」

「ムフフ、それはね! ※※※※※※※※※※※※※※※※」

え、何故に? それもう散歩じゃなくなっちゃうじゃん。まあいつか、好きなところに連れてってあげよう

「いいよ、じゃあ行こ」

「やった! ありがとう!」

キャーキャーキャーキャーキャー!!!

ん? 微かだけど悲鳴が聞こえたような...

「ねえお姉ちゃん、今のつて... 悲鳴?」

「フランも聞こえた? 行ってみよう」

「うん」

到着

なっ!? なんて休日なのにヴィランが出てくるんだよお!!! チツ、さつさと片付けて散歩の続きをしよう

「フラン、下がって。フランじゃあの人殺しかねないからね。私がやる」

「う、うん、分かったよ。じゃあ私はあの女の人を助けておくね」

「ああ、助かる」

そう言ってフランは吸血鬼の身体能力を活かしてすぐに助け出した。んじやま、私もやりますか

「ほらこっち向けヴィラン」

「ああ? なんだよテメエら人の邪魔しやがって。てかお前、雄英の生徒じゃねえか。あのレポーターに喧嘩売ったやつ。おもしれえ、かかってこいや」

うわあ、爆豪くんみたいだな。爆豪くんとは強さは桁違いに弱いだろうけど、性格が、ね、うん、似過ぎてる

「はあ、ハイハイ。じゃあね、名の分からぬヴィランさん」

ドン!!

お、綺麗に腹に入った。よし、気絶させたしメモを書いてつと。よ

し、これをこいつの背中に貼って、OK。そしたら警察署へ連行。バイバイ

「やっぱりお姉ちゃん強いね。流石黒霧や弔を追い詰めただけはある。まあ結局お姉ちゃん意外抑えられなくて黒霧が逃げたし、その後も弔連れてかれちゃったけど」

「あ、あのう……………」

「オールマイトが2人いたら捕まえれたかもねえ。まあいいやこの話題は。それより早く行こ。時間無くなっちゃうよ」

「あの…」

「あ、そうだった。行こ行こ！」

「あのー！」

「！び、びつくりしたあ。な、何？」

「びつくりしたなあもう！どうしたのお姉さん。何処か怪我したの？」

「い、いえ、その、助けてくれて、ありがとうございました」

「ん、この人足引き摺ってる。しかもちよつと血が滲んでるし。一応処置しとくかな」

「…動かないでそこに座って下さい。足の怪我を治しますから」

「そ、そんな…！助けていただいた上に治療までさせるなんてできませんー！」

「いいから早くしろー！」

「ひっ！……………はい、分かりました……………」

「よろしい」

「はあ、つたく、なんで治療を拒む必要があるんだよ。治すつて言うつてんだから素直に従えばいいのに」

少女治療中…

「で念の為に包帯を巻いてつと。よし、これでいい」

「はい、終わりましたよ。気を付けてくださいね」

「ありがとうございます」

「いえいえ、大したことでは無いです。では。フラン、行こ」
「うん！」

体育祭があるって！

あちこちでこの前の事件のニュースとかについて話してる…。いつも以上にうるさい。ちよつと怒鳴ってやる

「うっせえ！静かにしろ！」カス！」

うお！爆豪くんと被った！ま、まあカスは言っていないし？別にそこまで酷くないよね？ね？

「皆！ホームルームの時間だ！私語を謹んで席につけ！」

「着いてんじやあねえかよ。ついてないのはお前だけだ」

「グツ、無念」

あはは、ここまで原作通り。さてと、相澤先生、あの包帯グルグル巻きになつて来るんだよな…。前世じやめつちや笑ってたけど、今回はそうもいかんよなあ。うん、我慢しよ我慢

『相澤先生復帰はえー！』

「相澤先生！無事だったのですね！」

「無事言うんかなあれ」

だ、ダメダメ、笑つちやダメだ！我慢我慢

「俺の安否盃どうだったいい。それよりも、まだ戦いは終わってない」

ほえ？まだヴィラン居たっけ？一応個性勝手に使って調べたけど居んかったよ？

「まさかまだヴィランが…！」

う、峰田と同じ事を考えると…。何か複雑な気持ち…

「雄英体育祭が迫ってる」

……え？

『学校つぽいの来たー！』

た、体育祭？あー、もうそんな時期かあ。んなら緑谷くんの練習もうちつとハードにするかな。今のは意外と簡単にこなしてるし

「(な、何だろう今寒気が…)」↑緑谷

あー、でも私も個性伸ばさなきゃなあ。それに時間が結構取られるだろうし、緑谷くんの練習は内容だけ提案してオールマイトに任せるか…。いや、私も緑谷くんと一緒に個性伸ばせば良いだけだな。よし

そうしよう

「皆、すっごいノリノリだ」

「君は違うのか？ヒーローになる為に在籍しているのだから、燃えるのは当然だろう」

「飯田ちゃん、独特な燃え方ね。変」

「まあまあ、そこはまたそれぞれのアイデンティティって事で見逃してあげて」

確かに変な燃え方だけでも。それは仕方ない。飯田はそういう奴だからな

「緑谷くんも、そうじゃないのかい？」

「僕もそりゃあそうだよ」

「デクくん、飯田くん、紗綺ちゃん、頑張ろうね体育祭」

う、麗日、だよな？顔が怖えぞ。ひええええ

「か、顔がアレだよ麗日さん」

「どうした？全然麗らかじゃないよ麗日」

さてさて、どうしたもんかなあ

「皆！私頑張る！」

ま、取り敢えず返事はした方がいいよな

『おー！』

「私頑張る!!」

『おー…』

「けど、どうした。キャラがフワフワしてんぞ」

「そういえば、麗日さんに聞いてなかったな…」ボソッ

ん？これはアレか？ヒーローになりたい理由みたいな…。フーム、私も一応あるにはあるけど、何か驚かれそうでヤダな

昼休み

「麗日さん」

「何？」

「麗日さんはどうして雄英に、プロヒーローになろうとしてるの？」

「う、え、えーと、それはあ」

「お金だったっけか。まあ私がいいとは思うけどねえ」

「お、お金!? お金欲しいから、ヒーローに？」

「究極的に言えば……。何かごめんね! 飯田くんとか立派な動機なのに私恥ずかしい……」

「生活の為に目標を掲げる事の、何が立派じゃないんだ？」

「うん。でも、意外だね」

「私もそれでいいと思うよ。それに、親孝行も、その中には入ってるんだろ？」

「驚かれたけどまあいつか。人の事を何でも分かるのが私だからね。これじゃストーリーみたいだけど」

「私の実家建設会社やってんだけど、全然仕事無くてスカンピンなの。あ、こういうのあんまり言わんほうがいいんだけど……」

「あー、そういやちよつとだけ貧乏的なあれだったっけか。何かして解決出来ればいいんだけどなあ」

「建設……」

「あ、麗日さんの個性なら、許可取ればコストがかかないね!」

「どんな資材でも浮かせられる。重機要らずだ」

「2人して同じポーズ取ってる。今思うことじゃないかもだけど、この2人仲良いなあ」

「でしよー!? それ昔父に言ったんだよ! でも……」

『うちに就職する?』

『うん! 大きくなったら、父ちゃんと母ちゃんのお手伝いする!』

『気持ち嬉しいけどな、お茶子。親としては、お茶子が夢叶えてくれる方が、何倍も嬉しいわ。したら、お茶子にハワイ連れて行ってもらえるしな!』

『……父ちゃん……』

「私は絶対、ヒーローになってお金稼いで、父ちゃん母ちゃんに楽しませたげるんだ」

ま、いい話だよな。親のためにお金稼いで、親に楽をさせてあげるなんてさ

「ブラーボー！麗日くんブラーボー！」

………こいつのこれが無ければ完全にいい話で終わってたのになあ

「ちなみに、君はどうなんだい？霧雨くん」

「私か？私は単に個性が強かったからね、人の役に立とうと」

「そうなんだ。意外と普通……」

む、意外とはなんだ意外とは。個性が強いだけの普通に人間じゃ私は……

「緑谷くんがああ！居たああああ!!」

「オールマイト！どうしましたか？」

「お弁当、一緒に食べよ。霧雨少女も」

あ、飯田が領いた。なら、行くかな

『是非』

「先ずは霧雨少女だ。1つ言う事は、皆を護ってくれてありがとう。但し無茶が過ぎる。これからは気を付けるように。はい、お茶」

むー、でもそれで死者も出なかつたんだし良いでしょこれくらい。私もそこまでの傷は無かつたわけだしさ

「はい。ありがとうございます」

「さてと、聞きたいことがある。長くなっても構わないから、あの脳無とかいうヴィランについて、知っていることを教えてくれ」

脳無について？って言っても私が知ってる事なんか多分大人達も分かつてる事なんだろうけどなあ

「分かりました。知っていると思うので簡単に纏めますが、脳無はア

レ以外にも種類がある事、誰かはわかりませんが、とある人によって作られた存在である事、個性はオールフォーワンが関係していると思われる事、複数の個性を持つている事、そして、これは憶測ですが、アイツよりも強い脳無が居るであろうという事ですネ」

「ふむ、なるほどな。分かった。君に聞きたいことはそれだけだ。そして次は私からの頼みだ。雄英体育祭までに緑谷くんを少しでも成長させたい。忙しいかもしれないが、これまで通り協力してくれ」

「勿論そのつもりです。言われずとも協力する気でいましたよ」

まさかオールマイトから言ってくるとは思わなかったな。さてと、緑谷くんをどう鍛えたものかな…

この後は原作通り進み、1日が終了した。帰った後はフランの相手をしてヘトヘトになり、9時に寝たのに翌朝起きたのは6時だった。寝坊したかと焦ったよ全く…。フランはというと、吸血鬼の為夕方から夜の間起きている。学校に通うつもりは無いらしいし、まあいいだろ

雄英体育祭、開催!!

うし、今日は遂に体育祭の日だ！1位目指して頑張るかな。なんとか緑谷くんの練習もやりたいとこまで出来たし、まだ使いこなせはしないけど、楽しみだな

「お姉ちゃん」

あれ、フランが起きてる。珍しいなこの時間はいつも寝てるのに「どうしたのフラン、何かあった？」

「えと、その、頑張ってるね、体育祭。今日はちゃんと起きて応援するか」

「ありがとう。じゃあ、行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい！」

よし、元氣も貰えたし行こう。さっきまで思ってた以上に頑張っちゃおうぞおおお！

「皆！準備は出来てるか!?もう時期入場だ！」

お、もうそんな時間か…。うーん、外の人の数エグいんだよなあ。緑谷くんとか緊張しないといいけど。人が死ぬような個性は使っちゃあかんらしいし、ちゃんと考えながら戦わないとな

「選手宣誓！霧雨紗綺！」

ミッドナイト、ここに居ていいのか…。男子が顔赤くなってるぞ…。よし、選手宣誓か、原作の爆豪くんみたいにやってやる

「えー、我々選手一同は、日ごろの練習の成果を存分に発揮するとともに、今日ここで戦えるということに感謝し、ここまで支えてくださった方々に誇れるよう正々堂々と全力で挑むことを誓います。それと、

絶対私が勝つ!!」

よし、スツキリした。これで思う存分やれるぜ

『Boo〜Boo〜』

ブーイング凄いいけどまあいいや気にしなくて。そんな事よりも集中してやらないと足元すくわれるし、気を付けないと

「さあ、第1種目の発表よ!第1種目は、これよ!」

障害物競走だよな、全部空飛んでればいいじゃん簡単だ。よし、それで行こう

「スタート!」

飛行開始!これで1位通過目指そう

「あ、アイツ飛んでるぞ!足に掴まれ!」

へ?あ、足に掴まる?飛んでるの私しか居ないし、私に掴まるってことか!?

「キヤア!ちよつと!離してよ!!」

女の子みたいな声出しちまつたじゃねえか……!いや体は女の子だけどね?前世男だったから心も男なんだよクソツ!

「離さないなら知らないからね落ちてても!」

スピードアップ!最高速度は見えないだろうから半分くらいのスピードで行こう

『ギヤアアアアア!た、助けてえええええ!』

あ、あれ?すぐに全員落ちてった?ま、まあこれで軽くなった。さつさと行かないと!もう何人か前行ってる!

「お、ありやあ何だ!?物凄いスピードで飛んでくる奴がいるぞ!」

「十中八九霧雨だろう。アイツ、ちよつと自棄になってやがるな」

正解だよ相澤先生!飛んでるのは私だし確かに私は自棄になってるよ!でも判断をミスりはしないから大丈夫!仮装ヴィランも飛び

越してつと。じゃあな皆の者。こっからは私の独走劇さ！

「さあもう1人戻ってきたぞ！1位通過は、霧雨紗綺だあ！」

よし、これで1位取れた。後は確か、騎馬戦と個人戦でのバトルだったからな、この2つも1位取れるように頑張ろ

その頃紗綺の自宅では

「紗綺が1位取ったわよ！フラン！まだまだ、頑張って応援しましょうね！」

「うん！（やっぱりお姉ちゃん凄い。私もあんな風になりたいな）」
と、盛り上がっていたそうなの

体育祭：中編

よし、1位通過できたし、次の騎馬戦、頑張るか。私の点は確か1000万だったはずだし、信頼出来るやつと組みたいな

「霧雨さん、一緒にチーム組もう」

「緑谷くん？いいのかい？私めっちゃ狙われるぞ？」

「大丈夫！だから、回避に徹底して騎馬戦を乗り切りたいんだ。機動力のある個性の人を選んでチームに誘おう」

優しいやつだなホントに。こうやって素直に育ってくれて嬉しいよ私は。まるで母親だけど私は母親ではないからな

「あなたですね、先程の障害物競走で1位を取ったのは」

あー、えーと、確か、発目、だったか？あのサポート科の

「そうだけど、どうしたんだい？」

「この私を、あなたのチームに入れていただきたく」

やっぱりか……。まあここで関係作つとかないと後で大変だから、一応OK出すか

「いいよ。サポート科はサポートアイテムを自由に使えるんだろ？じゃあ、それを上手く使うとしよう」

「あ、良かった！紗綺ちゃん！一緒にチーム組も！」

麗日、待ってたよ。麗日の個性はかなり有利になるからな。無重力って結構強いと思うんだ、使い方によっては

「麗日。いいよ、一緒に組もう。よし、メンバーも揃ったところで、ちよつと作戦会議をしよう」

そうして決まった作戦はこうだ。先ず、緑谷くんには個性は使わせない。これは次の個人戦を想定しての事だ。で、捕まるそうになった場合は、麗日の個性で緑谷くんと発目を無重力にして、発目のサポートアイテムで麗日は飛ぶ。で私もそれに合わせて飛ぶ。つまり後方は麗日、前方は緑谷くんと発目に任せる、という事だ。無論全部作戦通りに行くなんて有り得ないから、臨機応変に対応しないといけないんだけど。その時はその都度作戦に変更を加えていくつもりでいる

「第2種目、スタート！」

ま、待て待て待て！何で全員私達の方に迫ってくるんだ！これじゃ逃げ場が……。あ、分身使って壁を作ろう

「禁忌『フォーオブアカインド』」

よし、分身だと一々司令を出さなくても行動してくれるし、何でもっと前に出さなかつたんだろう

「おーと！突如として現れた霧雨紗綺の分身により、他のチーム最高得点まで迫り着けない！しかも何よあの硬い壁！イレイザー、お前のとこの生徒ヤベエやつしか居ねえぞ、どういう教育してんだよホント！」

「うるさい。アイツは元々の力量が凄まじいだけだ。先の襲撃も、ほとんどアイツが片付けてたからな」

「わああ！そんなすげえ生徒がお前のクラスには居んのかよ！こりや攻略は難しいぞー！」

相澤先生話盛りすぎでしょ。結局逃がしちゃったし、オールマイトなんてフランに一瞬で倒されてたし。あれ、もしかしてフランって超強い？

「はあ、んじやま、ここで一応は待機。あの壁の上は上空一キロの所まで結界が張つてある。そう簡単に破れはしないだろうけど、油断はするなよ」

「おーと！……で試合が動いた！全員最高得点を狙うのを辞め、お互いでハチマキを取り合っている！」

うーむ、爆豪くんとか轟とかはそう簡単に諦めてくれる奴じゃないし、実況がそう言っても、油断はしない方がいいな

「本体、轟が氷で結界を壊そうとしている。爆豪くんも同様、爆破で壊そうとしている。どうする？」

お、マジか。どうするかなあ。んー、じゃあ倒さない程度に抑えつけてもらうか

☒倒さない程度で抑えてくれ☒

【了解】

この後私達の所に誰かが来ることは無く、試合は終了した。で控え室？に戻った後なんだけど、母さんから電話が来てね、出たらめっちゃ騒がれたよ。携帯から耳を少し離さないと耳が痛くて仕方ないよあれは。で内容は、『第1種目も第2種目も1位通過おめでとう！これで優勝したら何か好きな物買ってあげるわ！何でもいいから！じゃあ、フランに替わるわよ。。。。お姉ちゃん、おめでと。やっぱりお姉ちゃんって強いね。多分本気でかかってこられたらこの世界に勝てる人居ないんじゃないかな。だから大丈夫！頑張ってるね！』との事だ。いやあ、良い家族に恵まれたもんだよ私は。父さんも体育祭を見てたらしく、その後メールが来てた。『おめでと。この後も頑張れ。応援してるぞ』との事だ。うん、嬉しい事に変わりはない。この後はレクリエーションをして、個人戦だ。何人かは分かんないし誰が来るかも分かんないけど、誰が来ても戦えるように準備しておかないとな

体育祭：後編

残りはレクリエーションをして個人戦のみ。恐らくだけど、原作で言う常闇のところが私になる筈だから、八百万と戦ったら多分芦戸。でその後は爆豪くんだよな確か。うわあ、爆豪くんかあ、なんか戦いづらいなホント。勝っても怒鳴られるし、負けても本気でやれよって怒鳴られそうだし…。もうどうすりゃいいんだああ！はあ、どうせなら勝とう。どっちみち怒鳴られるなら勝った方がいいに決まってる！レクリエーションはどうすっかな、うーん、意外と気晴らしになったりするかもだし、一応参加しよっかな

レクリエーション終了！よし、先ずは八百万だ。私は何が来ても対応出来るようにしておけばいいし、試合見てようかな時間まで

1回戦目は緑谷くんと心操だ。まあ緑谷くんが勝つだろうし、そこまで気を張らなくてもいいかな

「Lady start!」

ここで心操が緑谷くんに尾白の事を罵って反応させるんだよな、緑谷くん、指は後で治してやろう

「おおっとーいきなり緑谷がstop!大事な1試合目なんだから盛り上げてくれよ!」

「心操の個性だね。緑谷くん、尾白に言われた事忘れたのかな。いや、尾白が罵られるのを聞いてられなかったのか。緑谷くんはそういう奴だし」

「え、紗綺ちゃん居たの!?!気付かへんかったわ」

酷いなそりや。まあいいや。試合に集中しよう

「ああ居たよ。さあ、試合に集中して。緑谷くんを応援しなきゃ」
「うん!」

この後の試合は原作通り進んでいった。ここからは私の試合だけを綴ろう

よし、八百万だ。さてと、さっさと終わらせるかな

「Lady Go!」

お、盾を作るか。なら、原作の常闇と同じ様に、盾を集中的に攻撃して場外にしよう

「あーらよつと」

バゴン!

あ、あれ?盾が壊れちゃったよ。力入れ過ぎたかな…。もうちよい弱くしてつと

「ほっ!」

バン!

「むう、力を抑えるのって難しい…。八百万綺麗だし怪我させたくないんだけど……」

「あら、手加減をされるなんて心外ですわ。ちゃんと本気でやって頂かないと(こ)、これで本気じゃないの!?!もつと強度のある盾を作らないと……)」

あらら、なら、それを作り終わるまで待たせて頂こう

「よっこいせつと」

「おおつと!?!霧雨紗綺が座った、これはどういう事だあ!?!」

「な、何のつもりですか?」

「早く盾作ってくれよ。さっきも言っちゃった通り、私は八百万に怪我させたくないんだから。あ、あと私ここに座ってやるから、何してきてもいいよ。というか疲れたもうあんまし動きたくない」

ほらほらー、めっちゃ煽ってるし油断してるように見せてるけど油

断していないからねー。さてと、盾も作り終わったところで、攻撃を再開しますかね

「ふぎけないでくださいー！このような場でそのような手加減など無用！本気でかかってきてくださいー！」

あ、怒らせちった。観客からのブーイングも凄いいし、なら終わらせて頂こう。よしと、準備完了。これで投げ飛ばそうもう

「分かった分かった、怒鳴るな。じゃあ、これでCheckmate。私に話しかけたのが失敗だったね」

ドン

「八百万さん場外！霧雨さんの勝利！」

「霧雨紗綺、すぐに片付けてしまったあー！これは強い！」

さてと、戻るかな。あ、決して舐めてかかったわけじゃないよ？でも、私に本気で向かってくる人を見ると、つい遊びたくなっちゃうんだよねえ。この性格はヴィラン向きだけど、私はヒーローになるからね！

「霧雨くん、君は彼女で遊んだのかい？ダメじゃないか！真剣に戦わねば、失礼というものだ！」

「あ、い、飯田…。いやあ、その、すみません、次の試合からちゃんとやります」

でもワープ系の個性使われるより断然面白いでしょこっちの方が。ワープ系の個性なんて使ったらそりやもう私の勝ち確定だよ

第2試合、芦戸との勝負。実はね、酸に対しての対策とかなんも考えてないんよ。だからどうしようかなあって。うーん、もう普通に場外に出すか？

「よーい、スタート！」

「行つくよー霧雨！よつとーほつ！」

うわ、めっちゃ酸飛ばしてきたし！ちよ、溶ける溶ける！溶けても死なないし傷もすぐ治るけど服が溶けたらアカン！ちよっ！待ってってば！

「おお！霧雨紗綺が避けてるぞ！なんだなんだ!? コイツは酸が苦手なのかあ!?!」

「いや、単に服が溶けるのを避けているのだろう。前に聞いた事だが、芦戸が1番戦いにくいらしい。酸で服が溶けるからだそうだ。アイツは怪我してもすぐ治るし死なねえからな」

「何そのチート個性!?!ともかく芦戸がちよつと有利なのかこれは」

はあ、よし、OK。反撃開始！

「じゃあ、これで終了。よつと」

「え!?!ちよっ！待って！これはズルいつてえ!!!」

よし、これで勝った。いやあ、ホントにこの個性強いわ。神様にこの個性頼んで正解だったかなあ

「なあんと霧雨紗綺！影を繋げて体を操るといふ奇妙な事をしだしたぞお！そりやもう影を切らない限りは解けないな！」

影真似の術：成功っ。くう！これ言ってみたかったんだ！シカマルの術使ったけどホントに強いよねこれ

はい3試合目は爆豪くんですはい。勝てると思うけどもう体温まってるからちよつとだけ厳しいかもだなあ。私は個性縛られてるし

「よーい!!スタート!!」

「オラア!!!」

おお、早速仕掛けて来よつたわコイツ。しかもスロースターターだから前の試合よりこっちのが強いんよホント。よし、頑張ろ

「霧雨紗綺真正面から喰らったア!!!おいおいアレは大丈夫なのかア!?!」

「チツ、お前ホントになんなんだよチート野郎が...!」

「まあまあそう怒るな。じゃあな爆豪くん、すまん」

ドガン！

「カハッ!!」

ドン!!!

あ、やり過ぎたわ、爆豪くん壁にのめり込んでるよ

「爆豪くん場外！霧雨さんの勝ち！」

よし、次は決勝戦。轟とだし油断せずにこのまま勝ちきろう。そうしたら母さんに好きな物買って貰えるんだ！

「よいい、スタート！」

うえ!!?は、早っ！もう足が固められちゃったよ！

「霧雨さん行動h」「ちよつと待って下さいよ。私はまだ動けますよ。だから、まだ終わらせません！」??」

炎仕舞ってつと。よし、これでまた左使つてこないとか嫌だからな、忠告しておこう

「轟！お前が本気にならないと、私には勝てないぞ!!本気でかかってこい！相手になってやるからよ!!!」

「……」

よし、じゃあ行くか

「よつと！」

「!!」

「何よあの凄いスピードのパンチ！轟めっちゃくちやギリギリで避けたぞ!!」

むう、当たらないかあ。よし、これならどうだ!!

「暗黒の雪（ダークスノー）！」

一応元は命奪つちまうけど、私のは命は奪わずに体力を奪う。つまりこれを轟がくらったら私は勝ちに大きく近づく。そしてこれには雪とか言いながら熱を持たせてる。氷なんてすぐ溶けるくらいの熱をな。つまり炎を使つて防御するかオールマイトみたいに全部避け

るかしないと、轟は負けちゃう訳だ

「……………分かった、ギブだ。お前には敵わない。それに、アイツと同じ力を使うのは、癪だ」

ほえ？いや、まさかギブアップするとは…。てっきり左を使っているとと思ったんだけどな

「轟くんギブアップ！勝者霧雨さん！」

「これで全試合が終了！さあ表彰式よ！」

表彰式は轟が意外過ぎたのと爆豪くんが騒ぎまくってたこと以外頭に入ってこなかった。記憶があるのは家に着いた後からだ。それ程疲れてたのかなあ。ちなみに、買ってもらった物はどうと、新しいぬいぐるみさ。フランにあげたくてね。よし、明日は休み。原作だと麗日の家に麗日の両親が来るんだよな。行けたら行こうかな

体育祭後の休日

ふあああ、よし、麗日の家に行くかな。つと、その前に何か差し入れ買ってこつと

「母さん、麗日の家に凸ってくる。帰る時に連絡入れるよ」

「分かったわ。行ってらっしゃい」

「うん、行ってきます」

「ここら辺コンビニあったっけかな？うーん、まあ適当に歩いてりやなんかあるら。原作じゃ麗日買い物行つとつたし」

よし、買う物はこんなもんでいいか。まあ無難にジュースとお菓子とかなんだけどね。さてと、行くか

「あれ？紗綺ちゃんじゃん。どつたの？」

お、麗日だ。ちょうどいいタイミングで来たな。あーでもこつそり凸るっていう作戦が…。まあいつか、一緒に行こ

「暇だし麗日の家にも行こうかなど。それで差し入れをね」

「え、そうなん?!部屋片付いてないんだけど…」

こう言ってる奴に限って綺麗なんだよなあ。まあ麗日の両親が居るだろうから散らかってるとしたら片付けられてるだろうけど

「大丈夫大丈夫。さ、麗日の買い物が終わったら一緒に行き」

「あ、うん(うへえ、安い物しか買ってないからなんか恥ずかしいな)」

ああ、そういやそうだったな。よし、ここは私に払わせて頂こう

「麗日、私が払うよ。家にお邪魔させて貰うんだし、これくらいするよ」

「ええ!?!いやいいよ悪いし…」

「お金無いんだろ?だったら買ってやるよ。今回使わなかったお金で、親になにかしてあげな」

「う、うん…。ありがとう」

よし、そうと決まれば早速買っちゃおう。何買えばいいかかんないけどな！

「じゃあ欲しい物どんどんカゴに入れて。どんだけ入れても構わないからさ」

「いやあ、それは流石に…。最初から買おうと思ってた物だけで十分だよ」

へえ、ここが麗日の家か。初めて来たな

「あれ？鍵が空いとる。掛け忘れたかな…」

お、親御さん達はもう来てるのか、早いな

「お茶子ー！！」

「父ちゃん母ちゃん!?え、来てたの!?え、え?」

「あれ、そつちの子は確か優勝してた霧雨つて子じゃないか」

「こんには。麗日と友達やってます霧雨紗綺です。どうぞ宜しくお願ひします」

「あらあら、ご丁寧にどうも。こちらこそ、お茶子を宜しくね」

「はいー」

いい両親じゃないか麗日よ。さてと、上がらせてもらおうかな

「麗日、上がっても良いかい?」

「あ、うん、ええよ」

よし、いぎー……。普通に綺麗にしてるやん。片付けてないとか言ってるながら片付いてるんだからなあ

「あ、差し入れここに置いてくよ。後麗日の荷物も」

「うん、了解。ほら、父ちゃん母ちゃんも入って入って」

「こらお茶子、自分の荷物を友達に持たせちゃアカンだろう」

「あ、いいんですよ。私が買った物ですから。じゃあ、全員でお話しましょうよ」

あれ？なんか爆弾発言した気がする…。まあいつか、皆で話せば私は満足だし

「それじゃ楽しかったよ。また学校でね」

「うん、色々ありがとね」

「いいのいいの。じゃ」

さーてと、母さんに連絡入れないと

『もしもし?』

「あ、母さん？もう帰るね。歩いてくからちよつと時間かかるけど」

『分かったわ。気を付けてね』

「うん、じゃ」

この後帰ると母さんとフランが死んだフリして居たもんだからホントにびっくりしたよ。心臓止まるかと思った。まあ止まっても死なないんだけどね

振替休日、帰りの道中

えー、今私は、麗日の家から帰ってるところだったんだ。でも、何故かヴィランに囲まれております。事の発端はついさっきの事

私は麗日の家から帰っていて、しばらく休もうと公園に寄ったんだよ。あ、今日はフランは居ないよ。寝てるからね。で、ベンチに座った途端にぎっと20人くらいのヴィランが急に来たのよ、うん。で今は睨み合いの状態

「何の用だい、おじさん達」

「いや、俺らはまだお兄さん世代だ。そんな事はどうでもいい。お前だな、霧雨紗綺ってのは。お前を倒せば、俺らは有名人だ！って訳で、相手になってもらうぜ!!!」

その声を合図に、全員で襲ってきた。しかし、全く攻撃が噛み合っていないで、逆にそれぞれの攻撃を消す事になってた。これなら私の出番はない。そう思ってたんだけど…

「皆！無闇に攻撃してもお互いの攻撃を消してしまう！ちゃんと考えて攻撃を仕掛ける！」

って言う声が響いてね、そしたら急に流れが変わったんだよ。ちゃんとこつち狙って打ってくんのだからもう対応しないといけなくてさ、真面目に戦い始めたんだ

「よつとー！フン！」

自分の魔力を地面に流していて正解だった。そのおかげで操れるようになった土を使って、大体10人くらいは捕まえられた。それでも半分減ってなかった。私1人にどれだけ人を使うんだろうか

「オラア!!」

ドン！

「カハッ！いってえ、急に後ろからやるのは卑怯なんじゃないかな？ねえ、ヴィランのおじさん達」

「戦いに卑怯も何もあるかよ！」

「クツクツクツ、まあ確かにそれもそうだ。なら、こちらも本気で行かせてもらおう」

よし、魔力練り上げられた。で、これをまた地面に流してっと。よつと、さて、じゃあ反撃開始だ。先ずはこの土を柔らかくして足を引き込んで固めちゃおう。で絶対暴れるだろうし、暴れたら暴れるだけどんどん沈んでいくようにしておこつと

「な、何だこれ！ 抜けねえ!!」

「暴れるな！ 暴れるだけ引き込まれるぞ！ 落ち着いて対策を練るんだ！ 急げ！」

よし、下半身全部入ったな。じゃあ固めてっと。で、警察に電話電話

警察到着

「ダメじゃないか！ まだ仮免すら取得していないんだから、こんな沢山のヴィランと一人で戦うなんて、やったらダメだ！」

「はい、分かりました」

「なら良い。さて、後で署に来てくれるか。話があるんだ、プロヒーローの方達から」

「はい」

プロからの話…。何だろう。まあ十中八九怒られるんだろうなあ。でもただ怒るだけならここでもいいから、どんな怒られ方するんだろ。いやあ、嫌だなあ

「で、話と…」

「ああ、それは、君は特例で、ヒーローとしての許可を与える、という事だ」

ヒーローとしての許可を与える…。え!? つ、つまり、私はもう自由に個性を使っているって事か!? うおおおおおおおおお! すげー!

「但し、まだ学校には通ってもらうぞ。正式にヒーローとして活動するのは高校を卒業してからだ。無論、イレイザーヘッドとは話をつけてある」

「は、はい!」

「一応だが理由を言っておく。1つ目。これは一部しか知らないことだが、オールマイトの活動限界がそこまで長くない。つまり、オールマイトに匹敵する強さのあるヒーローが必要だ。聞いたぞ。授業でオールマイトとほぼ同格に戦ったと。であればそこは問題ない。そして、君は学生にしてはヴィランとの戦闘経験が豊富すぎる。以上の2点から、君をヒーローとして迎える事が決定したんだ」

うわあお! やったぜ!

「じゃあ帰っていいよ。個性を使えば一瞬だろう?」

「はい! ありがとうございます!」

よっしゃ、早速帰ったら母さんに報告しよう!!

指名の発表！

今日は指名の発表、そして私はもう既にヒーロー許可証を持っている事を報告する日である。いやあ、皆がどんな反応するのかちょっと、いやかなり楽しみだよ

「なあなあ紗綺ちゃん。私にも特訓つけてくれへん？早く強くなつて、ヒーローに認めてもらわなきゃ！」

「ん、別に構わないよ。でも、緑谷くんとは特訓のメニューを変えないとだし、ちよつと待っててくれるかな」

「うん！じゃあ、準備出来たら教えてね！」

「了解」

さて、じゃあ麗日の特訓のメニューを考えなければ。どうするかなあ。確か、武闘派のヒーローの所に職場体験に行くだろ？ならそこらはそつちでやってもらうとして、なら体力とか個性の強化とかか？うん、そうだな。緑谷くんにやらせてる基本を麗日にもやらせるか。よし、なら休日はなるべく空けておいてもらわないとな

「あの、霧雨さん」

ん？緑谷くんか

「どうした？」

「えと、その、オールマイイトが霧雨さんがヴィランに襲われたって言うてただけど、本当？」

あー、あのおじさん達か。別に襲われたところでそんじよそこらのヴィランに私が負ける筈が無いんだけどな

「ああ、本当さ。まあ大丈夫だよ心配しなくても」

「あ、うん」

さてと、そろそろ相澤先生来るだろうし、ちよつと静かにしてるかな

「おはよう」

『おはようございますー！』

お、包帯取れる。もう治ったのか、早いな

「ケロ、相澤先生、包帯取れたのね。よかったわ」

「婆さんの処置が大袈裟過ぎるんだよ。まあ俺の事なんてどうだっていい。今日のヒーロー情報学、ちよつと特別だぞ」

あー、ヒーロー名を決めるだかなんだかだったっけかな。まあ私はもう既に決めてあるから関係の無い話しよ

「コードネーム、ヒーロー名の考案だ」

『*****!』↑なんて言ってるのか聞き取れなかった

「よし、その前に霧雨！報告しろ。その後は好きに過ごせ」

「はーい」

さてさてさーで、皆は一体どんな反応をしてくれるのかな？

「えーと、私霧雨紗綺は、特例措置として、ヒーローとして活動が出来る事になりました。まあ学校には通うし本格的に始めるのは卒業してからだけど。ちなみにヒーロー名はリコール。想起って意味さ」

.....

『ええええええええええええ!?!』

お、良い反応じゃないか。さっきの沈黙で驚いてくれないのかと不安になったが、杞憂だったな、うん

「先生！何故霧雨くんだけがそうだったのですか!?!」

「言っただろう特例措置だと。こいつは振替休日、30人弱のヴィランに一斉に襲われ、その全てを1人で対処した。もう1つ理由はあるが、これは企業秘密だ」

この後私は暇な為寝ていたからどうなったかは分からない。でも恐らく原作通りになったんだと思うよ。あ、で仮免の試験なんかは私も一応出るらしい。じゃないと世間には認めて貰えない可能性があるとか何とか。まあ私は別にいいけどね

インターン開始!

「霧雨。お前は飯田についていけ。あいつ、恐らくだがステインに復讐をするつもりだ」

ステイン、ヒーロー殺しだっけ。オールマイト以外に自分は殺させない。他のヒーローはヒーローじゃない。そんな事を言ってるヴェランだったよな

「はい、分かりました。飯田がステインに襲われた場合、私は飯田のサポートに付きますか?それとも私が倒しますか?」

「お前が倒せ。プロヒーローが何人もやられてるんだ。飯田が勝てる相手じゃない」

「分かりました。ではこれで」

飯田、無理はしないでほしいな。あれはあれで何かのきっかけになったりするのかもしれないが、あまりにも危険すぎるからな。原作では死ななかつたけど、もしかしたら死ぬ可能性だってあるわけだし

咲綺 | エンデヴァー事務所にて

流石に行かない訳にはいかないという事で推薦があつたここに来ている。一応この人も脳無と戦うヒーローだったし、多分大丈夫でしょ

「お前、確か炎を使えたな?」

「え、ああ、はい。使えますよ」

「霧雨、こんなクソ親父に敬語なんざ使わなくていい」

いやあ、轟はあいつかわらず、お父さんのこと嫌いだねえ。もつと仲良くすればいいのに

「そういう訳にもいかないよ。今は教えてもらおう立場なんだからさ」

「ふむ、焦凍、お前も敬語を使え。お前もコイツと同じ立場に居るんだ」

「チツ、使いたくねえよ。お前みたいなクソ親父なんかにはな」

「ま、まあまあ、それで、今日は何を？」

ちよつと喧嘩止めないと絶対終わんないよこれ。轟は話したくない感じだけど、エンデヴァーが話したいみたいだし

「今日は午前は2人で対人の修行。午後はパトロールに出かける。毎日このスケジュールでいく。覚えろ」

「はいー」

じゃあ昼まで轟と対人訓練してればいいってことか。なら早速始めますかね

「じゃあ轟、さっさと始めよ。何処でやればいいのかわかんないけど」
「ついて来い」

「お、サンキュ」

流石に自分の親の事務所ってだけあって、部屋の位置とかは覚えてんだなあ

「なあ、なんであんなにお父さん嫌ってたんの？」

「あのクソ親父のせいで母はノイローゼになって、兄が死んだ。俺も、お前は最高傑作だとか何だと言われて、やりたくもない訓練をさせられた。吐きながらもやったが、他の子供、特に兄弟達は羨ましかった。だから

俺はあのクソ親父をぜってえ許せねえ…！」

おつふ、かなり募ってますなあ。昔っからこうなのか轟は。額の傷はお母さんが付けたんだっけか。左側が醜く見えるとか何とか言ってた気がする

「そうだったのか。私は親にも友人にも恵まれた立場の人間だから偉そうなことは言えないが、耐えられなかったらいつでも頼ってくれ」

「ああ、助かる。だがこれは俺の問題だ。俺自身の力で解決する」

「そうかい？まあ頑張るこつた」

この後は訓練、パトロールとスケジュール通り活動し、それを数日繰り返した。そろそろだろう。ヴィラン連合の襲撃、そしてステインと戦うのは

脳無襲撃

インターン開始から数日。今日も今日とてパトロール中だ。今日は少し長くやるこの事で、夜の7時までとなっている。その後は帰って色々やって就寝となる。いつ脳無の襲撃があつてもおかしくないから、結構ソワソワする

数時間後

今は6時48分23秒。もうそろそろだな。今日も襲撃は無さそうだ。一体いつ来るのやら。ん？

「きええええええええええ!!」

脳無?今からかよ、もうすぐ帰れそうだったのに…。クソウ、お前に八つ当たりしてやる

「オラア!」

ドガン!!!

人の体からはならないような音がしたし、すげえ硬いんだけど。筋肉すげえしこの脳無

「キ、キエエ、キエエエエエア…」バタツ

ふう、いっちよ上がり!にしても、雄英に来たやつに比べたらかなり弱いな。さて、そんな事よりいまは避難誘導が先だ。早くしないと皆さん逃げて下さい!これからここは戦闘場所となります!怪我をなさらないように気をつけながら早く逃げて下さい!

早くしてくれ、これで人が死んだら後味が悪い

「あ、あの」

「なんですか、どうかしましたか?」

「私の息子が居ないんです。さっきまですぐそこに居たのに…」

息子が居ない?つたく、この非常時に何してんだよその子供は。しょうがない、見つけますか。白眼を使つてつと

「……………あ、居た。大丈夫ですよ。ヒーローに保護されていますから、さあ、あなたも逃げて」

「は、はい、ありがとうございます」

よし、引き続き避難誘導をと

数十分後…

やっとこちら辺の人は居なくなつたな。さてと、じゃあ私は飯田を探しますか

「俺の名はインゲニウム！お前を倒す、ヒーローの名だ！覚えておけ！」

ありやりや、既にドンパチやつた後ですかい。それに、あのヒーロー、原作でもやられてたな。あの2人助けて何とか倒さないと

「おい、ヒーロー殺し。ステイン、だったか？私が相手だ。来い」

「お前もヒーロー気取りのクソ野郎共の1人かあ？だったら殺してやるよ。ヒーローはただ1人、オールマイトだけだ！」

シュツ！

刀！血を舐められちゃダメだ、全部避けるか硬化して防がないと

「うん？お前、俺の個性を分かっているのか？」

「！何故そう言える？」

まあぶっちゃけ分かっただけだ！

「お前の視線がほとんど刀に行っている。それなら刀を重視して避けている、という事は容易に想像出来る」

なるほど…。それなら、刀だけじゃなくて、もっと本体の方も見よう、うん。ていうか、次で決める

「さあ、これでチェックメイトだ。避けれないだろ、この玉の数は」

「はあ？…上か！」

ドドドドドドドド！！

「ご名答。だが、サヨナラだ。お前は私を本物のヒーローでは無いと、そう言ったな。しかしな、生半可な気持ちでヒーローやつてる奴、居

ないと思うぞ。ヒーローになった奴は、皆が死ぬ気で国民を守ってる。過去に何があったかは知らないが、勝手に決めつけ、一般人を巻き込み、ヒーローを再起不能にもした。お前はオールマイトに憧れた少年だったのだろうか、今はもう、立派なヴィランだ。私には、ヴィランにかける慰めの言葉は無い。ただ1つ、後悔しろ。そして、心の中だけでもいい、全国民、そして、手にかけてたヒーロー達に謝っておけ」

「(本物のヒーローが、ここにも1人居たか)」

よくこの長い文章を噛まずに言った！偉いぞ私！さてと、飯田とヒーローの怪我の具合はつと…。そこまで酷くないな、よし、治しておこう

「怪我の具合を見せて。治す」

「……すまなかったな、要らぬ苦勞をかけた」

「フッフ、良いってことよ。私としては、飯田が無事で良かったよ」

よし、完了。さてと、じゃあ次はこの人を

「……………君には、やはり適わないよ。色々な面で」

「いや、私よりも優れている事が、きつとあるさ」

そう、きつと…。私よりも、ずつと優れている事が…

ヴィラン襲撃を止めます

飯田とヒーローの人は無事、大きな怪我もなく助けられた。そして今度は他のヴィランの相手なんだけど、これがまた数が多くて大変よ。脳無もすげえ量湧いてるし（虫扱い）。一先ずこいつらを倒さん事にやこれは収束せんし、いっちょ頑張りますかね

「さてさて、緑谷くんがあそこにいる訳だが…。何してるんだ？めっちゃキョロキョロしてるんだけど、誰か探してるのか？」

あ、目が合った

「霧雨さーん！ちよつと良い〜!？」

どうやら呼ばれたようだ。仕方ない、倒しに行く前に緑谷くんの方へ行くとするか

「なんだい緑谷くん。何か用かい？」

「グラントリノ…あ、黄色いスーツとマントのお爺さんのヒーロー見なかった？」

「？知らないが…」

グラントリノ？誰だっけ？名前は聞き覚えあるし緑谷くんのインターン先のヒーローなのは覚えてる。でも姿が…結構小さいとしか覚えてない…

「そっか、分かった。ありがとう」

変な奴。おっと、それより脳無を倒さないと。ステインは警察に引き渡されたはずだし。ていうか街ヤバいな。火達磨だ

「緑谷くん、私は行くよ。ちゃんと人命救助も戦闘もしないと。ヒーローとして」

まずは近くに居るアイツから！

「はあっ！」

ドン！ガガガガガガ！

あ、地面滑らせて更に街を破壊しちゃった。まあいつか、修復手伝えばいいだろ

「さ、てと？…ん？彼処に居るのは…」

やっばそうだ、雄英に来たヴィランと同じタイプ！なんでこんな所

にも居るかなあ。辞めて欲しいね全く。まあ居るからには倒すけど
「はあっ!!」

ドガン!

「っ!?クソツッ!離せコラア!恋符『ゼロ距離マスタースパーク!」

ドサツ

いつつ、受け身失敗した…。久しぶりに背中から落ちたよ

「キエエエアエエエア!!」

「っ!?グッ!」

ドン!!

「おっもおお…。っ!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!

「チッ!!」

どうするこれ!このままじゃ当たつちまう!あ、ミスった

「カハッ!」

クツソ重い!なんかコイツ強くねえか!?

「ツッ、『ダークスノー!」

パチン!

「キエエエエエエエエエアアアアア!」

ドドドドドドドド!

おい、ウツソだろお前。オールナイト並のパワーあんじゃねえかよ。まさか、周り巻き込んでダークスノーを消すとはな…。つたく、笑えねえぜこんなん

「ハア…ハア…ハア。クッ!」

仕方ない、捨て身だが、身体能力を上げて近接戦に持ち込むか。弾幕なんて張っても直ぐに消されるだろうからな。でも一応、弾幕を幾つか張っておこう

「光魔『スターメールシユトルム!桜符『完全なる黒染めの桜―封印―!』!天流『お天水の奇跡!』!マウンテンオブフェイス!」

よし、アイツが避けてる間に身体強化を…。恐らく全部吹き飛ばすだろうから、その時に攻撃を仕掛けよう

「はあっ!!」

「キエエエエアアアアアア!!」

「やっぱり!全部吹き飛ばした!この隙を逃さん!

「はあッ!!!」

「ドン!!!ガガガガガガ!!!」

「ハアッ!!!ハアッ!!!ハアッ!!!ど!どうだ...!」

「キ、キエエエエ、キエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

「っ!?クソツツ!まだ立ち上がるのかよ!」

「どうする!?本格的にヤバイぞこの状況!ヒーローは頼れない。皆他の脳無を倒すのに必死だ。脳無の弱点。頭を集中的に狙うか...!

「霧雨さん!」

「緑谷くん...!?ダメだ!来るなあ!!」

「キエエエエエエエエエエエエエエエエ!」

「不味い!!急いで緑谷くんを庇わないと!死んじまう!!」

「ドン!!!」

「ガハッ!バカ、な、んで、来たんだよ。来るな、って、言ったら」

「き、霧雨さん!?お、お腹が...」

「あー、やっべえな。回復間に合ってない。ハハッ、不死身の能力も使えんのに、体力が持たねえ、か。笑えてくるよ全く。こんな土壇場で、個性発動させる気力も残ってないとはね」

「大丈夫、だ。これ、くら、い...」

「霧雨さん!」

「っ!そうだ、こんな所で死んでたまるか。私には守りたいものも、守るべきものもある。私が死んだら、緑谷くんはどうなる?間違いないコイツに殺される。ダメだな、こういう状況になると、ネガティブになっちまう。死ぬなら守るべきもん守ってから死ね、私!

「うあああ!あああああああああ!」

「ドガン!!!!!!」

「キエエエエエエエエ...、キエエ、エ」

「バタッ!!!」

「た、倒し、た?」

「カハッ!ハア...!ハア...!ハア...!ハア...!ハア...!」

そうだ、傷、治さねえと…。ハア、こんな無様な姿、見せんのは久しぶりか、初めてか。もうどつちでも良くなってきたな。緑谷くんが生きてりやいいや、守った甲斐が有る

「霧雨さん！頑張って！死んじゃ、死んじゃだめだよ…！」

「おいおい、泣かないで、くれよ。折角、守ったんだから、笑えって、な？それに、私は、簡単、に、くたばったり、しないさ。ゴホツゴホツ」

ふう、落ち着け私。落ち着けば個性なんて直ぐに使えるようになる。よし、治ってきた。でも動ける気がしないな…。ったく、アイツ強すぎなんだよ。なんなんだ

「ふう、もう大丈夫だ。心配かけたね。けど、もうしばらく動けそうにない。君一人でヒーローの所に行きなさい。口答えしても無駄だぞ、問答無用だ。君を1発ぶん殴る程度の力は残ってる」

「っ…分かったよ。じゃあ、僕が君を運ぶ。それなら、2人で助かるでしょ？」

…コイツ、絶対に譲らないって目をしてるなあ。ま、いつか。私もしばらくしたら動こうと思ってたけど、そう言うならその言葉に甘えようか。ただ、1つ心配な事があるとすれば

「じゃあ頼むよ。尤も、君には私を抱える勇気があるのかな？おんぶでもいいが」

彼が極度の恥ずかしがり屋という事だ

「うっ…だ、大丈夫な筈。これは救助だから。よし、いくよ」
「ん」

へえ、本当に抱えられた。成長したねえ緑谷くんも

ん？(´・`・´)は…

「ここは私の空間。貴女ね、人の能力やスペルを勝手にポンポン使わないですよ。彼女達かなり練習して使えるようになったのに…」

「え、誰？」

「酷くない!?!私は○○○○○○○○○○、○○よ」

幻想郷との関わり

「私は幻想郷の最高神、龍神よ」

んー？なあんか聞いた事あるなあ。って

「はああ!？」

幻想郷の最高神!?!何、私死んだの？死んだからこんな所にいるの？それとも何、これは夢なの？でも感覚めちやくちやハッキリしてるんだけど

「別に貴女は死んでないわよ。ただ、まあ所謂仮死状態って奴ね。私が意識、魂のみをコチラに持ってきたのよ」

「そっちの方が驚きなんですけど!?!てか幻想郷の最高神が私なんかは何の用!?!」

「一々騒がしい奴ね。こんな奴に皆の能力が使われてるのね」

そりゃ騒がずには居られないでしょ!急に変な所に来たと思えばそこに居たのは幻想郷の最高神で!私は魂だけの状態でここに居るんだからね!

「私の用は簡単。貴女ね、力を乱用し過ぎよ。身体、壊れるわよ。意識も力に乗っ取られる。そうしたら貴女は最凶最悪の殺人鬼になるでしょうね。仲間も手にかけて」

「っ!?!」

「……………」

なあんてね!嘘よ嘘!でも、力を乱用すると身体が壊れるのは本当。今回はその忠告よ。今後は使う頻度、回数を控えなさい」

な、なんだよコイツ。人をおちよくって楽しいのか?てか忠告だったら他の方法もあったでしょうに。別にそんな嘘をつかなくても…「いいじゃない、貴女面白いんだもの。ここから貴女の生活を見させてもらってるけど、中々楽しいわよ。時には楽しく、時には悲しく、そしてまた時には激しく戦う。刺激があって楽しいわあ」

いよいよ意味わからん。もう考えるのを放棄しようか。うん、それ

がいい。じゃないと私の頭がショートしそうだ

「あ、そろそろ貴女を帰さないと貴女死んじゃうわね。じゃあ、また今度ゆつくりお話でもしましょう」

「……はあっ?! いや待て分かったから直ぐに帰せー! こんな事で死にたかないよ!」

「分かってるわよ。それじゃ、また今度ね」

ガバツ

な、なんだったんだ。てかあんな奴ともう1回会わないとならないのか。いや、それ以上か? はあ、それにしても億劫だ

「ん? ここは何処だ part2」

「起きて早々何言ってるん?」

「麗日?」

なんでここに麗日が?

「なんでって顔してるから教えるけど、ただ単にお見舞いだよ。デクくん聞いた。紗綺ちゃんまた無茶したって。その挙句死にかけたんでしょ? だからそのお説教も兼ねて」

「うっ、せ、説教は勘弁してくれ。さっきも夢の中で説教されたんだ。力を乱用すると身体を壊すって」

流星に魂だけ離れて会ってたなんて言えないし、スマン麗日、嘘をついたが許してくれ

「ふうん。あ、紗綺ちゃんのお母さんもお父さんも心配してたよ?」

「あ、やっべえ家に帰りたくない。絶対3時間正座で説教だ」

「我慢せんと。こればっかりは紗綺ちゃんが悪い！」

「うう、はい」

…龍神とのあのやり取り、なんか意味があんのかな。ただ力を乱用するなって、それだけなのかな。それだけじゃない気がする。まあ分らないことは考えても仕方ない。なるようになるさ

一方その頃龍神 side

「紫、一応忠告した。これで良いか？」

「はい。ありがとうございます」

「構いはしない。実際、私も彼奴と話してみたから。だが、あれ程力を使い無事なものも珍しい。またよく観察しておく」

「分かりました。では、失礼します」

「うむ」

霧雨紗綺、か。彼奴はどれ程の力を内に秘めているのか。これから先が楽しみだ

入院生活

うう、足痛い。ハア、母さん、説教長すぎだつて。ヒーローなんだから誰かを庇って死にかけるのは普通でしょ。知らんけど

「失礼しまあす」

ん？誰だ？

「来たよ、お姉ちゃん！」

「フ、フラン!?よく1人で来るのを母さんが許したね」

「ん？お母さんなら何も知らないよ。黙って来たんだ。言ったら絶対止められるし。それに私はもう500歳近くまでいつてるんだよ？流石に過保護すぎだつて」

あー、これは私も巻き込まれるパターンかな。どうして帰さなかつたんだ的な

「……まあ、いいか。でも、吸血鬼の時間が夜なのは知ってるけど、暗くならない内に帰りなさいね。流石に母さんも心配してここまで来そう」

「うん、分かった。じゃあさじやあさ、何かお話しよ！」

「いいよ。と言っても、フランは何か話題があるの？」

「うーん、あ、なんか紫が来たなあ。つて、紫なんて言われても分からないか」

紫？この前の龍神の件と何か関係があるのかな。いや、流石にあの妖怪でもそこまでは把握してないか

「いや、知ってるよ。幻想郷の賢者でしょ？この前龍神と話したからなあ」

「……」

あれ、フラン口を開けてどうしたんだろ

「はあっ!?!いや、え、マジ!?!」

「キャラぶれてんぞ」

「あ、うん。いやそんなことはどうでも良くて！龍神様に会ったの!?!」
「りゅ、龍神様あ？アレが様を付けるほどの奴なのか？私の事からかってよく分からん事を並べてただけなんだが」

あ、固まった。何、私何かヤバイこと言った？私が見たまんまの事を言っただけなんだけど…

「も、もう紗綺が凄すぎてよく分かんないよ」

フーム、納得いかん。あのよく分からん掴み所のない奴がなあ

プルルルルプルルルル

あれ、電話だ。てかマナーモードにするの忘れてただけだ。ヤバ
「もしもし？」

『霧雨少女か。よかった、繋がって』

オールマイトか。そういや最近全然声聞いてなかったな

「何かありました？」

『脳無と戦ったと聞いてね。心配だったから電話をしたのさ。で、大丈夫かい？』

「ええはい、大丈夫ですよ。個性発動させないように常に見張られてるんですよ怖くないですか。変な個性の人も居るもんですねえ」

『ハハハツ、信用されてないね！』

酷っ！え、オールマイトってこんなに毒舌だったっけ!?地味に傷付くなこれ…

「笑い事じゃないですよ」

『いや、すまないね。まあでも、君なら直ぐに退院するだろう？』

「ええ勿論。明日でもいいくらいですよ。もう痛くないですし」

『元気で大変結構！じゃ、待ってるよ』

「はい。では」

うっし、じゃあさっさと退院して学校に行かないと！包帯巻いてけって言われたらどうしよう。邪魔でしかないんだけど。まあ、そんな時はそんな時か。なんとかなるでしょ

演習試験、その準備

「あ、霧雨さん！退院出来たんだ！」

お？緑谷くんか。なあんか、ちよつとだけ深刻そうな顔になったな。皆は気付いてないだろうけど

「おうともさ。あんな怪我、個性さえ使えればすぐに治るのにあの先生ったら使わせてくんねえんだもん。余計な時間食っちゃったよ」

「あはは…。仕方ないよ、霧雨さんの怪我、凄かったもん。あ、あの時言えなかったけど、助けてくれてありがとう、霧雨さん」

「いいよいいよ。人を助けるのがヒーローだからね。ところで、私がない間に何かあったかい？」

何かがあつたんだとしたら置いてかれてるってことだし、一応聞いておかねば。にしても、変わってないねこは。相変わらず騒がしい「えっと、もうすぐ演習試験があるって事以外には特に何も」

演習試験？なんだそれ。原作であつたようななかつたような…。でも今からやるんだしあつたつてことか

「演習試験は、2人1組になって、プロヒーロー1人と戦うんだ」

「へえ、そうなのかく。って、え、飯田？いつの間に居たの」

「やあ。さつき来たところだ。それで、怪我は大丈夫なのかい」

「ああ、うん。大丈夫。心配かけたね」

……あれ、演習試験つて私どっち側に居ればいいんだろう。ヒーロー側？それとも生徒側？

『霧雨紗綺く、霧雨紗綺く、至急職員室まで来い』

これは相澤先生か？朝っぱらから呼び出すとは、一体なんの用だろ

コンコン

「失礼します」

「来たか。誰かに聞いたかもしれないが、今度演習試験をする。で、お前にはヒーロー側で、生徒と戦ってもらおう。チーム分けは今やっているから、完成次第また呼び出す」

あ、生徒側には入れないんだ。そりやそうか、もうヒーロー免許持ってるしな。でも、成績みたいのは付けなくていいのか

「恐らくだが、俺の担当と交代させる」

……マジですか。ちよつと思ひ出したぞ。あんたの相手つて確か轟と八百万じゃないか。うわあ、大丈夫かなあ。私一応病み上がりなんだけどなあ

「せ、成績はどうするんですか」

「誰かは決まってるないが、そいつらと戦った様子でつける」

「は、はい」

本格的に大丈夫かなあ？そんな事で大きな怪我なんてさせるなよ、私

「じゃあもう戻れ。そろそろホームルームだ。俺もすぐに行く」

あ、ヤッバ！時間が無い！しゃあないここは個性を使って……。時よ止まれ。…よし、この間にさっさと行こう

結局私の相手は轟と八百万になった。この2人、推薦入学だし頭脳明晰だしだから、かなり手こずりそうだけど、頑張つてやるつもりだ、うん。まあ大きな怪我をさせないように気を付けはするが、心配なのでちよつとセーブしようかと思う。よし、頑張るぞい！

演習試験開始！

少女達バスで移動中…

さて、着いた着いた。うーん、やっぱり広いねえ雄英。敷地内をバスで移動って凄いや、うん。あ、そういや私は何時スタートなんだろう。まあ合図があるでしょ。気にしないで休んでよつと

『じゃあ轟達始めるぞー。はいスタート』

さてと、何処にいるのかな？檻を使うにしろ使わないにしろ、場所だけは把握しておきたいな。つと、いたいた。大体500メートル先かな。とりあえず様子見で分身行かせるか。よし、じゃあ片方だけ聴覚を繋げてつと、OK

『早速お出ましか』

『轟さん、2人で行きましょう。霧雨さんは、1人で相手取るのは先ず無理でしょうから』

『ああ、もとよりそのつもりだ。いくぞー！』

『はい！』

あー、意気込んでるとこ悪いけどその分身私の半分しか力ないんだよね、うん。ほら、様子見だから丁度いいかと思っただし。って、ありやりや、もうすぐ倒されそうだねえ。早いな私の分身。我ながら情けないぞ

「さてと、行きますか」

あの2人なんか強くなつたなあ。勝てるかな…

「今度こそ本物だろうな、霧雨」

「さてね、どっちでしょう。倒せば分かるよ」

「それもそうですわ。行きますよ、轟さん！」

「ああ！」

つと、さっきの戦闘と同じなら最初に氷結が来るはずだ。とりあえず空を飛んどくか

「やっぱり、見えてたのか…！」

相手に話すことはなし！さっさと倒しましょうかね。あんまり遊び過ぎると先生にヒーローらしくしろって言われそうだし

「えっ？キヤアアアアアアア！」

よし、1人捕縛完了！なんてね、どっかに居るでしょ。私が仕掛けたあらゆる場所の牢のどれかに

「八百万！」

さて、2人捕まえて同じところに行ったら同じなので轟は倒しますか。そんな訳でとりあえず邪魔な周りの氷をはい壊します

「爆符『メガフレア・改』。これで氷は使えないよ、今結構暑いでしょ？」

「っ！ああ、焦げそうな程にはな。だが、炎がある」

「うっわあ、もっと暑くなりそう」

熱くなりすぎて耐えられなくなったら私の方がスペカ解除して一時撤退して体を冷やそ

「行くぞ、霧雨！」

「来い！」

「やっぱ無理暑い！解除！」

「はっ……？」

「いやあ、ごめんごめん。めっちゃ暑かったよ思ってた以上に」

「……まあいい、行くぞ「チエックメイト」は？」

ガン!!!

「カハッ（何が、起こった）」

「さてさて答えだよ。さつき技を出した時に君の上から岩を落としてたのさ。拳3つ分位のね。まあ完全に運任せだったわけだけど……。痛かったろ、悪かったね」

さてさて、八百万のところにいくこうかな。多分あつちはあつちで私の多くの分身と遊んでるだろうし

「待て……！終わって、ないぞ……!!」

「へえ……。起きれるんだね」

やっぱ強くなってるよね。前の轟だったらこの時点でもう倒れる、てか落ちてる。面白いじゃん、ちよつと本気で行こう

「っ!!グッ!!!」

ドオン!!

「はあっ!!」

おっと、氷は避けないとって、あれ、いつの間に捕まったんだ？

「捕まえたぞ。悪いが勝たせてもらう」

「……………フフツ、まだ勝ちを確信するのはさ、早いんじゃないかな？」

「氷が…!？」

よし、焦ったか？焦ったな？この隙にさっさと溶かしちゃおう。……………よし、もう薄い。これなら力づくでも壊せる！

バリーン！

「よし！行く、ぞ……」

バタツ

「霧雨!?おい、どうした!霧雨!!」

幻想郷との関わり part 2

「……………いい……………なさい！起きなさい！」

「はっ！」

「ここは……………。いつしかに来たあの空間？」

「全く…。やっと起きた？」

「ああ、うん。で、今回は何の用なの龍神？」

「うん？ああ、ちよつと幻想郷に来て頂戴な。回復をお願いしたい子が居てね」

回復をお願いしたい子？誰だそれ。大体の怪我ならえーりんが治せるだろうし、何呪いかなんかでもかけられての怪我なのか？それだったら私にも何とか出来るかはわかんないよ、万能じゃないんだから

「とりあえず、名前だけ教えとくわ。その子の名前は、レミリアよ。今瀕死の状態なの。紅魔館は壊滅したけど。パチュリー、こあ、美鈴、咲夜は再起不能。2度と起きる事は無いでしょうね」

あー、フランの暴走の時のか…。てかレミリアは動けるんだなあ。咲夜も再起不能でも生きてるだけ凄いわ、うん。人間なのにねえ。半分人間捨ててるじゃん

「レミリアは今、紫の元で保護されてるわ。今から行って来て頂戴。向こうには貴女の分身を勝手にだけど置かせてもらったから、今回は実体があるわよ」

「いや実体ないなんて言われたら絶対断つてたわ良かったね。ま、いいよ。レミリアを助ければいいんだね？知ってるだろうけど私にも限界はあるから過度な期待はしないように」

「ええ、勿論。紫」

「承知しております」

さてと、先ず今のレミリアの状態はどうなんだろう。紫が保護してるならそんな酷い状態ではないだろうけど…。お？着いたみた、い…。は、はえ、こ、こんな状態かあ。まさか、胴体が上半身と下半身で真つ二つのままとは思わなかったよ。四肢もげてるし

「能力で物の目とやらを壊されたので再生しません。一刻も早く、治してあげて下さい」

「勿論」

さて、時間を逆行させても良いけど、それだと私が個性解いたらまたバラけて今度は本当に死んじやうかもだし、きちんと治そう。よし、なら魔法を駆使するしかないね

「СЛГДНРРОЛЭШЦЮЬЭЛНЯБЛЙЁВГЮЗЕГЗЦ
БХЧЭЬЦЧЭЬШЭЦУШаЭЬЬЧЦЭЬХФТЧОСКЛ
СДЙМNNμκιλθ（我、魔法を操る者。この者の傷を癒し、再び目覚めさせよ。ヒーリング魔法、リカバリー）」

我ながら何言ってるか分からんな、これ。母さんはこんなのを作ったのか。まあおかげで1人の命を助けられるし、助かったけど

「治ってる…!？」

「当たり前ですよ、治したんですから。あー、やっぱり無理するとキツい〜!」

「んう……」

あ、レミリアが起きた。うん、これで私は帰れるのかな?さてと、龍神は何処かね〜

「八雲紫!?!と、誰だお前は!」

あー、めんどくさい方向に話がいつてる…。誰だって言われたんだし名乗ればいいよね?」

「私は霧雨紗綺。貴女の妹さんの保護者」

「何…!?!フランは!フランは無事なの!?!」

「ちよつ、落ち着いて、苦しい」

や、やつと離してもらえた…。息が詰まるかと思った…

「ご、ごめんなさい。で、フランは無事なんですよ〜!?!」

「あ、当たり前でしょ。1回めつちや病んでたけど。貴女達を破壊してしまった事を悔やんで」

うわあ、めつちや悔しそうな顔〜。どうしよう、これ、再会させてあげた方が良いよね。フランはフランで会いたがつてるだろうし

「んで、レミリアさん、貴女、フランに会いたい?」

「当たり前じゃない！この世でたった1人の肉親で妹なのよ!？」

「あ、あー、うん、悪かった、悪かったから落ち着いてくれ」

とりあえずフランにレミリアに会いたいか聞こう。何となく会いたいって言うだろうけど

「じゃあ今度フランに聞いてからまた来る。私も起きないと心配かけるだろうしね」

「分かったわ、フランによろしく」

「紗綺」

「ん？」

なんだ龍神か。今の今までどこに居たのやら。さっきまで見当たらなかったし

「1つ話がある。ついてきなさい」

「へーい」

話ってなんだろう。今後の事にかなり関わってくる事じゃなければいいけど、嫌な予感しかしない

「よし、じゃあ言うぞ。あのレミリアは、数多く存在する幻想郷の中の1つで生まれたレミリアだ。つまり、お前が知ってるであろう幻想郷とは異なる幻想郷でのな。だから、来る時は1度この空間に来なさい。ここからなら私がその幻想郷へ送ってやれる」

なんだコイツ。なんで急に口調変わったんだ？いつものヘラヘラしたのじゃなくて威厳が感じられるような、そんな感じ

「分かったよ。じゃあ私は帰るよ。また何かあったら呼んで」

「ああ、まだ当分無さそうだが」

この後分身と入れ替わり1人で考え事していると、丁度良いタイミングでフランが入ってきた。母さんも一緒だったけど、母さんには席を外してもらって、先程の出来事を伝え、レミリアに会いたいか聞いた。答えは即答で「会いたい!」だった。今度の休みにでも連れて行こうと思う

試験結果と買い物へ

今日は試験の結果が発表される。まあ、なんだ、筆記試験は全然大丈夫だと思う、うん。だって大賢者の力も借りたし。カンニングはしてないからお咎めはナシでしょ。で、問題は演習試験の方よ。途中で気絶したからどうなったのか心配で心配で…

「はーい結果発表してくぞ。ちなみに赤点が留守番なのは嘘な」

『ええー！？！』

「当たり前だ。そういう奴ほど訓練が必要だからな。だが、向こうで補習は受けてもらおうぞ」

……ドンマイです。絶対寝る時間削られまくること間違いなし。私だったら耐えられないね

―数日後

期末試験の結果発表も終わり、今日は、皆でシヨツピングモールに來ています。夏期合宿の準備の為だね。何買えばいいか分からないので適当に麗日についてきてます。で、なんかね、そろそろ彼女、緑谷くんへの思いに気付き始めてきているようなのよ。さつきも緑谷くんに言った事を後悔してるような素振りあったし

「あれ、緑谷くん誰かに絡まれてるな。しかも結構顔強ばってるし。ちよつと行ってくるか。ここに居て、麗日」

「え、あ、うん」

「よつと」

上から飛び降りちゃったけどまあいいか。何か壊した訳でもないし

「緑谷くん、その人知り合い？」

「あ？てめえ…！チツ、何でもねえよ、じゃあね、緑谷くん？」

「ケホツケホツ、待てツ…！死柄木弔…！」

死柄木弔？あー、あれか。確かに居たなあ。でも一応原作に影響出さない為に捕まえるのはやめところ

「緑谷くん、大丈夫かい？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

「大丈夫なら良かった。さ、買い物続けよ。時期に時間になっちゃうし」

「そうだね。じゃあ、僕はこっちに行くから」

「ん、了解」

さて、私は麗日のところに戻って買い物続きするか。さつき飛び降りちゃったし、もう飛び上がっても変わらないよね

「よつと。お待たせ、麗日」

「うん。それより、何して来たの？」

「結果としては、死柄木弔に絡まれてた緑谷くんを助けてきた。まあいいじゃないか、折角来たんだし、楽しくやろ」

「ええ……。はあ…。うん！分かった！」

よし！じゃあ何買おうかな。カバンでも新調しようかなあ。うん、そうしよう。リュック買おうと

「麗日、ちよつとリュック買いたんだけどさ、良い？」

「うん、いいよ。どんなのがいいの？」

「丈夫でシンプルなやつ。そんな派手でも私には似合わないし」

「アハハッ、確かに、今もシンプルな格好してるよね」

むうー、そんなに笑わなくても…。今の格好って、まあ確かにジーパンにTシャツという格好ではありますけども。他に何を着ろと。しかもこの暑い中で

「ま、そういう事。さ、行こ。時間がもつたいないし」

「だね！あ、その後虫除けスプレー買っていい？さつき買うの忘れてさ」

「勿論。付き合ってもらってるんだし、私も付き合うさ」

この後特に何かあるわけでもなく、各々買い物済ませ解散した。私は家が近い緑谷くんと一緒に途中まで帰った。これから夜になるし、レミリアのところにフランを連れて行くと思う。で、実行したんだけど、そしたらね、うん。家族が増えた。家が無いしフランもこっちに居たいらしいので、こうなった。まあ私は別に構わない。部屋も

余ってるし。てな訳で、さらに賑やかになった我が家なのでした

夏期合宿開始

―バスでの移動中

ワイワイガヤガヤ……

「ねえ紗綺ちゃん、質問あるんだけどさ、良い？」

「いいよ。何？」

「たまに一緒に歩いてる子達誰？可愛いなあって思ってたんだけど」

「たまに一緒に歩いてる子達……。レミリアとフランの事かな。てか可愛いだったらその2人しか居ないな」

「ほら、USJの時に来た金髪のヴィラン居たでしょ？その子とそのお姉ちゃん。お姉ちゃんの方は最近来たんだよ」

「あれ、ヴィランって言ったのはまずかったかな？麗日が固まって青くなってるよ」

「えーっと、つまり、ヴィランと一緒に暮らしてるの？」

「ん、んー、細かいけど訂正すると、元ヴィランね。今はもう可愛い妹みたいな感じだよ」

「そっか。まあもう悪さしないなら良いのかな。じゃ、いきなりごめんね」

「うん、大丈夫」

「あれ、バスが止まった。ここ……思いつきり道の途中なんですけど!? てか峰田大丈夫か? さっきからトイレトイレ言ってるけど」

「煌めく眼でロックオン!」

「猫の手助けやってくる!」

「どこからともなくやってくる!」

「キュートにキャットにステインガー!」

『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!』

「あ、プッシーキャッツが来た。まあそれは良いとして、この森の先なんだよなあ、宿舎とか。しかもバス行っちゃったし。どうすんだろ、こっから走るのかな」

「と、言う訳で、皆にはこの森を突っ切ってもらおうよ!」

「3時間以内に来ないとお昼ご飯抜きね!」

3、時間？え、ここそんなにかかるの？じゃあ程よく遊んでから行くのかな

「トイレは…？」

……ドンマイ、峰田…

「うおおおおお！漏れる漏れる漏れるうう！」

いや立ちションするのかよ！……ん？峰田が行った方なんか居るな。ちよつと行ってくるか

「ぎやあああああああああ！」

つたく、なんでこんな化け物居るんだよ。もしかしてこの森全体に居るのか？それなら3時間かかるってのは納得、いや、もっとかかるかもなあ

「ほいっと」

ドン！

「大丈夫か、い…？ちよつ！漏れてる漏れてる!!」

「あはは…もう、我慢出来なかつたぜ…」

「おい峰田？峰田!？戻ってこーい！」

な、なんでコイツは失禁したからと言って失神しようとしてるんだ？精神弱すぎやしないか？こんなんでヒーローになって大丈夫かよ…

「はあ…。とりあえず皆呼んでくる。早く行かないと」

さてさて、この先が更に不安になった訳だが。まあ…峰田の失敗くらゐどうかしてくれるよね？うん、そうだと信じよう

「皆、ここバケモン居るからさつさと行こ」

『喋りながら3体も倒すなよ！』

「え…」

—2時間30分後

ヤバイヤバイ時間がもうほぼ無い!

ピー、ピー、ピー、ピー

…ん!? な、なんでこれが鳴ってるんだ…? 相澤先生にしか渡してないし、使うのは緊急時だけっていう話だったのに…

「どうしました?」

『霧雨は1人でこっちに来い。但し仲間は見捨てるな』

ガチャツ

………はい? ど、どういう事それ! 一人で行くのに仲間は見捨てるなあ!? いや、私は1人しか居ないんだからそんな事出来る訳…。ん? 1人しか? あ、そっか、分身を使えばいいのか。よし、じゃあ早速出してっつと

「じゃあ皆! 私は相澤先生に呼ばれたから先に行くね! バイバイ! 頑張ってる!」

シユン!

「う、うぷ…」

「おい何吐きそうな顔してる」

「い、いや、調子こいて瞬間移動使ったら酔いました…」

「はあ…」

呆れられた…!? いや、そんな事より今は吐き気をどうにかしないと…。うう、気持ち悪い…

「じゃあ皆でお昼ご飯よ!」

「は、はい…」

「て訳で! 現役学生の手料理プラス私のちよつとしたアレンジ!」

『いただきます』

……なんだこれ。なんでこんなことになったんだ。はあ……。皆は大丈夫かなあ。これ食べ終わったら様子を見に行こうかなあ……

―食後

「じゃあ皆さん、私は食後の運動に行ってきますので何かあれば先程のように呼んでください」

「行ってらっしゃいー」

さあてと、個性使って皆を探さないとなあ

夏期合宿地へ集合！

『ハア…ハア…』

み、皆大丈夫か？私が行った時にはもう既にボロボロってどういことよ

「だ、大丈夫？」

「紗綺ちゃん…！た、助けて。もうムリ」

あー、うん、もうダメだねこりや。皆まだ終わってないのにバツテバテじゃん

「おぶってあげるから行こう。皆！進むよ！」

『へい…』

「やった…！」

よいしょつと。あれ、これじゃああの化け物来た時に対応出来ないじゃん。分身出して対応出来るようにしておこうかな

「霧雨さん、さつき相澤先生に呼ばれたって言ってたよね。何して来たの？」

「んー？ご飯食べてきた。何故か私が作ったけど」

『はあ!?!』

え、何、ご飯食べてきたらダメだったの？あ、ダメだったね。皆食べてないし多分もう食べれないもんね

「ま、まあまあ。あ、ほら、化け物出てきたよ」

『（話を逸らしやがった…）』

は、話を逸らさないと…！ていうか皆満身創痍だし私がやるか。まあ分身にやらせるんだけど

「はあ…！」

ドン！

『（や、やつぱ強え…）』

「ほら！ボーツとしてないで行くよ！」

でもこれどっちだ？個性使って調べよつか。……………あつちかな。よし、行こう

紗綺 side・終

・
・
・
・
・
・

ヒーローズ（相澤） side

「で？あの子は何しに行ったわけ？」

「十中八九、アイツらの手助けだろうな。霧雨はそういう奴だ」

「ふくん？意外とちゃんと先生してるんだね」

意外とってなんだ意外とって。俺だって先生くらいする

「…まあいい。そのガキは誰だ」

「この子？私の甥っ子。洗汰っていうの」

「そうか」

夕方くらいには来るだろう。それまでここで待つのは合理的じゃない。俺は俺の仕事をして寝るか

ヒーローズ（相澤） side・終

再び紗綺 side

もう夕方じゃん。ホントにここ化け物多過ぎるって。もう皆死にそうだもん。でもまあ私は自分ではほぼ戦ってないしな、分身に任せただけだから

「そろそろ着くから頑張れよ〜！」

『おー…』

反応が薄い…！まあ今回だけは許してやろうジヤマイカ。皆疲れただろうし。お！外が見えてきた！

「ほらーもう森を抜けるぞ〜！」

『おー…!!』

あれ、ちよつと元気になってる？そうかそうか、この森から出られ

るのがそんなに嬉しいか

『つ、着いた~~~~~!』

「遅かったね〜」

「いや、アレを3時間以内についてというのは、学生には厳しいと思いますよ?。」

まあ例外も居るには居るだろうけどさ。私も頑張れば瞬間移動無しでも行けそうだし

「問：自画自賛ですか?」

そんなんじゃないよ。私は純粹に思っただけさ。てか何気に久しぶりの登場だね。最近話してなかったし

「答：今まで何度か接触のあった幻想郷へ、調査に行っていました。

マスターに接触があったのは、私が出発したしばらく後でしょう」

あー、そういう事。っていうか大賢者って1人で行動出来るんだ。知らなかったよ

「答：勿論です。しかし、マスターの体力を大幅に消費します。元来、私はまだ取得の出来るスキルではありませんので」

なるほどなるほど。ね、名前付けていい? いちいち大賢者って言うのもアレだしさ

「答：マスターにお任せします」

じゃあ大賢者だから大ちゃん! っていうのはダメか、大妖精と被ってる。うーん…。あ、大賢者って性別は?

「答：細かくはありませんが、恐らく女だと思われれます」

ふくん? あ、じゃあ、私達が会ったのは何月?

「答：5月14日となっています」

わくおまさかのこいしの日。じゃあ転生した時のこっちの日にちは?

「答：7月23日です」

ふくむ、なるほどなるほど? じゃあ、なつみで。なんか語呂合わせしたらなったし。ニックネームはなっちゃん

「分かりました」

あれ、さつきとちよつと喋り方違く、な、い…?

バタツ

「マスターに名付けをされた事により、大賢者から慧知之王へと進化致しました。マスターが倒れたのは、マスターの魔力や妖力など、色々な力を私の名付けに使われたからでしょう」

ああ、そうなの…。もうダメだ、ヤバイ意識落ちそう…

「ではスリープ状態へとなります。1時間後には完全に回復する訳ではありませんが動けるようにはなるでしょう」

うん、分かった、じゃあおやすみ

夏期合宿1日目終了

「ん、んー」

「目が覚めました？」

あゝ、うん。なんか動きがめっちゃめっちゃ鈍いけど起きたよ。おはよ
「それなら良かったです。では外へ出て下さい。皆が夕食の準備を
しています」

ん、了解

「ふわあ。動きにく」

「あ、紗綺ちゃん来た！」

「おー、体大丈夫か？」

「うん、大丈夫。ちよつと動きが鈍いけど、気にしないで」

さてさて、火をつけるか。なんか皆作る前に話してたっぽいし。何
を作るのかは知らんけど、まあ任せとけば何とかなるら

ボツ

「火つけたから、料理しちやおつか。話すのはそれからしよ」

『了解！』

「あれ、俺の仕事取られてないか……？」

あ、ごめん飯田。後のことは任せるから頑張ってくれ。私も作るか
な

「爆豪って料理出来るんだ！意外！」

「ああ!？」

「こら、怒らない怒らない」

「…チツ!!」

盛大に舌打ちしたねゝ爆豪くん。ある意味度胸がある。自分が勝
てないと分かっている人にそんな事を出来るとは…

「てめえ、今何考えやがった」

え、何、爆豪くんって心読めるの？なんで私が思った事にイラついてるの？と、とにかく誤魔化さないと

「いや、爆豪くんが盛大に舌打ちしたなあって」

「……フン」

「え、鼻で笑われた…？」

「ドンマイ」

おのれ瀬呂範太！自分がドンマイコールされるからって私にやりやがった！

ドン

「ガハッ」

『ドンマイ、瀬呂』

うんうん、我は満足じゃ。さてと、そろそろ遊んでないでちゃんとやらないと。時間が遅くなっちゃう

『いただきます！』

『ごちそうさまでした！』

というわけでご飯は終了。ある程度私は回復したがまだ眠い。体の動きも鈍いし。て事で私はさっさと部屋へ行きさっさと風呂へ入りさっさと寝た。うん、疲れてる時にはこれが1番良い気がするよ。でね、久しぶりになんだけど…

「なんでまた変な夢え!？」

「黙らんか馬鹿者!」

ドン!

「いっただあ!」

そう、私はよく分からん爺さん、しかもかなり強い爺さんに絡まれ

ていた。疲れて寝ればこれかよ…

「〜！で？何か用なの？てかここ何処なの？おじいちゃん」

「儂をおじいちゃんと呼ぶでない！はあ…。まあいい。焦るな、順番に説明する。先ずこの場所だが、お前の正徳領域だ。心の中でもいい。で儂の用だが、お前に1度会ってみたかったから黄泉の国から来たというだけじゃ」

へえ〜黄泉の国から…。へっ？黄泉の国!? うっわあこれはまた面倒な事になる予感が…。てか絶対面倒な事になるよこれ

「て訳で追われてるからちよつと匿ってくれんかの？」

もう…。これは普通には居られない……………!

「んな事出来る訳ねえだろクソジジイ！」

「な、なんじゃと!？」

「いいかよく聞け！私は体の中に死人を匿うつつもりはない！ていうか絶対ヤダ！追われてるなら帰れよ！」

「それが嫌だから居るのだ！体の事は心配するな！別段乗っ取るつもりもない！ただ本当に匿って欲しいだけなのじゃ！」

「知るか！映姫の所でも幽々子の所でも行っちゃまえ！はっ！」

やっぱ口が滑った。絶対映姫と幽々子って誰ってなるよね…。はあ…。自爆した…

「…お主、映姫と幽々子の事を知っておるのか…？」

「いや今のは忘れ…！えっ？」

「お主は映姫と幽々子を知っておるのだな!？」

え、何この人幻想郷の住人？え〜、じゃあ龍神に引き渡しちやええば終わりじゃん。いいやそうしようかな

「だから何なの。てかあつちは私の事知らないよ？こつちが一方的に知ってるだけだし」

「良い良い。では儂は勝手に住み着くのでな」

「おい巫山戯んな！」

「はっ！」

覚めたか……。なんだあの爺さん。まあいいや、今度また龍神の所に行ってコイツを引き剥がしてもらうかな。うくん、まだ眠いや。二度寝しよ

この後変な夢を見ることは無かったとき。チャンチャン♪

夏期合宿2日目以降

今日からの訓練内容は、個性の限界を突破し、強化するというものだ。しかしまあ、かなりキツイ。私なんか1番体力の使うものを常時発動して増強型の攻撃を切島と共に受けていた。まあ1番体力を使うのは魔法なんだけど。魔力が1番少ないし。んでね、使ってる魔法は身体能力を底上げするのと、念の為に解けたとき用に回復魔法を発動し続けてる。これでこの猛攻撃を耐えてる訳なんだけど……

「めっちゃ痛いんだけど！皆そんなに強かったんだね!!」

何故なら私は爆豪くんという攻撃的な性格の奴と緑谷くんの練習相手のような感じで攻撃を受けているからだ。うん、めっちゃくちゃ痛い。痛みで集中切れないようにする為に痛覚無効は使うなつて言われたから使ってない。そのせいでめっちゃ痛い。緑谷くんは本気でやらないとこの後が怖いらしい。大丈夫だ許してやろうジャマイカ

「死ねえ！」

「いや本当に死にそんな攻撃辞めて!?!ゴフツ」

『?!』

アイタタタ、あーあ、爆豪くんの言葉に反応したら1部個性解けちゃった。まさかそこを緑谷くんにやられるとはね。どうしよ、訓練で血い吐いちやった

「だ、大丈夫?霧雨さん」

「ノープロブレム!大丈夫だよ」

「なるほど、幾ら霧雨さんでも失敗はあるということか…。それに加えて個性が解けたという事は、集中力を削げばダメージを負わせられる?いや、でも実際の戦闘においては霧雨さんも増強型を使える。そうなる集中力を削ぐだけだと直ぐにKOされてやられてしまう。この場合の対象方法は、やっぱり初手で突っ込む事か?でもそれだと失敗したらすぐに倒されるし、成功しても多分返り討ちにされる――」

「ブツブツブツブツブツブツ
お、おー、めっちゃ私の分析してるな。でもまあ、私の弱点だったら目の視力が弱い事かな。まあまだBだからアレだけど、それ教えて

あげようか

「緑谷くん、横槍を入れるようだけど、私の弱点は視力が弱い事だよ。それを踏まえて作戦練りな。爆豪くんはとりあえずさっきの汗腺を開くやつをやつててよ」

「ああ!?…チツ!!」

うんうん、今日も平常運転ですな。さてさて、これから緑谷と模擬戦をするつもりだけど、どんな作戦で来るのかな。ちよつと楽しみだ。…アレ、私って戦闘狂だったっけ?

「うん、この作戦で行こう。霧雨さんお待たせ。もう大丈夫だよ」

「了解。じゃあ先手は譲るよ。その方が上手く行きやすい作戦だろう?」

「うん。やっぱり作戦は筒抜けなのかな?」

「いや、心は読んでない。ただの勘だよ」

「分かった、行くよ!」

「おう!来い!」

よし、恐らく私に読めないような攻撃をしてくるだろうし、視力上げところかな。アレを言ったから罪悪感凄まじいけど

「はあっ!!」

ドン!

「じゃあ次はこつちからね。フツ!」

「っ!グツ!フツ!ハッ!クツ!」

「どうした?避けてばかりだと勝てないよ?」

ドン!!!

「お、重い…!でも!はあっ!!!」

ドン!!!!

「甘いよ、ガードに転じれない訳ないだろ?」

ドガン!!!

「グツ!…カハッ!ま、まだ…まだ!」

「フフツ、耐えるねえ。それでこそ緑谷くんだよ」

「僕だって、成長してるんだ!皆に、置いていかれる訳には、いかないから!!」

ドン!!!

「ねえ、緑谷くんの作戦はただ突っ込むだけなの？それなら私、かなり期待外れなんだけど？」

ちよつと言葉に棘あるけど、これで煽って本気を出させる。じやないと、面白くない！

「勿論、まだまだ行くよ！」

ドン！ガン！ドドン！

そゆことね、ただ突っ込むように見せ掛けて私の通常なら見えるけど見にくい所で攻撃してる。面白いけど、今は視力上げてるから多分もうこれ以上はお互いの体力を削るだけかな

パン!!!

「っ!? (な、何が、起こっ…て!)」

「これね、相手の神経を乱す暗殺術。起き上がれないでしょ？初めて使ったけど、よく耐えたね」

潮田渚と死神しか覚えてないけど、これらの数人が使ってた術っていうかそんなの。とりあえず回復してあげよう

「リカバリー」

よし、これでいい。これから夜は肝試しがあるし、楽しみだな

肝試し&ヴィラン襲撃!

今からB組と合同で肝試しをする。なんか対決みたいにして、B組が先ず驚かす側、私達A組は驚かされる側だ。原作だと緑谷くん1人で余ったけど、今回は私が居るから1人にならず、私とペアになった。因みに補習組は宿舎にて勉強中でございます

「あっちこちから悲鳴が上がってるね。緑谷くんこういうの大丈夫な人だっけ?」

「う、うん、お化け屋敷くらいなら大丈夫なんだけど」

キャー~~~~~!!!

「……今回は大丈夫じゃないかも……」

だらしないねえ。これならまだ私の方が怖がつてないよ。あ、そういえば今日ヴィラン来るのか。うへえ、せめて原作に沿って行動できるように頑張ろ。一応プロヒーローだし個性は使えるでしょ!

「まあ、そうだね。さ、私達の番だ。行こうか」

「うん……」

さあて、どんな仕掛けが待ち受けているのかね。ん?なんか今一瞬変なのが見えたような……。血塗れのゴーグル?どういう事だ?

「霧雨さん?行かないの?」

「ああ、ごめんごめん。行こう」

まあ、気にしないようにしましょう。凄い嫌な予感がするけど

「っはあく!面白かった!あとは皆の反応を聞いてようかな」

実は私、緑谷くんとはぐれ1人でゴールしてしまいました。走ってたら出てしまった。まあそろそろ襲撃だろうし、良いんだけど。つと、そんな事考えてたら早速だね。森中にガスが回ってる

「フフツ、今回も面白い人居るかな」

……私ってやっぱり戦闘狂だったんだな

あ、居た。あれはB組の拳藤と鉄哲かな？って事は八百万が居るのか。助けないとかなあ

「あ、おめえはA組の！」

「どもども、霧雨紗綺です。ん？あれ、八百万無理した？」

「はい…。私達にガスマスクを作り、気を失ってしまいました」

「ふうん。じゃあ八百万の事よろしくね、2人共」

さーて、元凶は何処にいるのかな？あ、居たわ。あんな森の中心になんて居たら格好的だわな。特に鉄哲とか切島とか爆豪とか、血の多い奴らからしたら

「やあ、ヴィランくん？それ止めてくれないかな、友達が気を失ったんだけど？」

「そんな事を言われてはいいそうですかと止められるわけが無いでしょ」

「それもそっか…。じゃあ、とっ捕まえる！」

てかこのガスの効力なんだろう。なっちゃん、分かる？

「神経に影響する類のガスですね。マスターだから良いものの、普

通であれば気絶はする代物です」

「ほほ、私は耐性があるのか。てか個性の影響かな？」

「そうですね。ですがいくら大丈夫とは言え危険ですので長期に延ばすのはお勧め出来ません」

「そうだね。私が大丈夫でも他の子達は大丈夫じゃないだろうし。」

「この後さっさと倒して緑谷くん助けに行かないとだし」

「えっ、ちよつと待ってピストル持つてるのは聞いてない!!」

「バン！バン！」

「あつぶない！ま、まさかのピストル…。なんて物騒な物を学生に向けてるんだよこのヴィラン」

「まあ、もう終わらせるけど。フツ！」

「ドン!!!」

「ガハッ!」

「ふう、終わった終わった。これでガスも無くなるだろ」

「さあ、緑谷くんの所に行くか。あの筋肉丸出しの奴と戦ってめっちゃボロボロになってたし」

「SMAAAAAAAAAAAAAAAAATH!!!」

「あ、終わった。今来たばつかなのに終わっちゃったよ。とりあえず緑谷くんに話しかけてから洗汰くん持つてくか」

「緑谷くん？大丈夫かい？」

「霧雨、さん…。お願い、洗汰くんを…ヒーローの、所に」

「うん、そのつもり。後で戻ってくるから、ここでじっとしててよ?」

「あはは…。もう、動けそうにないけどね……」

「よし、さっさと行ってこないと。このままじゃ緑谷くんが危ない。」

相澤先生とかは一応補習中だろうし、そこに行けば会えるでしょ

「ほら、行くよ。早く早く」

「あ、う、うん」

この子の親って確かヒーローだったよね。この子もヒーローになるのかなあ

「緑谷くん、ほら、行くよ」

「霧雨さん……。うん、分かった」

「おっと、立たなくていいよ。私が運ぶからさ」

「うん……。ありがとう」

よし、行こう。確か原作では障子が運んでたよね。その方が体が大きくて安全だし、私も会ったら渡そうかな

「じゃあ、頑張って捕まってる。緑谷くんは怪我人だし、ある程度スピードは落としてくから」

反応無いけど、大丈夫かな。まあ見た目程のダメージは無いし、しばらくまた病院だけど、安静にすれば大丈夫か

「よつと」

なるべく衝撃は伝わらないように空を飛んでくけど、森の中に居る障子達を見つけられるかな

「あれ、ダークシヤドウ暴走してる？マジか、アレ止めなきゃじゃん」
光に弱いんだしとりあえずめっちゃ眩しいのやれば何とかかなるか？という訳でボルサリーノ、能力借りるよ

「緑谷くん、目つぶってて」

「え、うん……」

よし、じゃあはい！

「ウギヤアアアアアアアアア！」

「これは……霧雨！」

「大丈夫か？つと、障子、緑谷くん任せた」

よし、とりあえずダークシャドウを止めよう。今ので大分ダメージ
というか、そんなのはあつただろうし、攻撃を仕掛けよう

「はあっ!!」

ドガン!!!

「カハッ！」

「常闇！これで大丈夫か？ダークシャドウ、仕舞える？」

「ああ、助かった」

「大丈夫。とりあえず他の皆の安全を確認しよう」

「それに関しては問題ありません。軽傷者は居ても、重傷者、もしくは死者などはこちら側には居ませんので」

あ、そうなの？じゃあとりあえずトガヒミコの所に行こうか。あの子、麗日と蛙吹に喧嘩売ってるはずなのよ

「分かりました。では、そこまでの道案内は務めます」

お！お願いね。その案内通りに進んでいくから

「はい。お任せ下さい」

「とりあえず行こう。森の中は何人が居るはずだから」

そういえばコレだっけ、爆豪くん連れてかれるの。気を付けて見えないとな。原作通りだから爆豪くんはまだ良いけど、他の子達が危ない場合は助けないと

「そのままストップをかけるまで進んで下さい」

了解。こつちね。いやあ、それにしてもありがたいね

「こつち。皆ついてきて」

お、居た居た。ほお、アレがトガちゃんですか。あ、蛙吹の舌が切られた。っと、ここら辺で出るか

「行くよ」

シュツ!!

「っ!?な、なんですか貴女!邪魔しないで下さいよ!」

ナイフだけ避けておけば、あとは何とかなるかな。血を採られなきや変身される事もないし

「ん?なんですかって、ヒーローだよ?」

「そんな事は分かっています!まだヒーローでは無いヒーローに憧れる学生という事くらい!」

「いや、学生は合ってるけど私もうプロヒーロー。そこんところよろしく」

よし、とりあえず撤退させないとダメだから、なんだっけ、茶毘?の所に吹っ飛ばせば良いかな?

「はあっ!!」

「グッ!」

ドガン!!!ヒューーーーーー

おー、ホームランだ。よし、爆豪くん捕まって他の皆は怪我しないように上手く立ち回ろう。これ以上原作は壊したくないし

「行くこう」

『ああ(うん)』

「……」

なんか不気味だな、爆豪くんが静かなのって。自分の身に起きる事を予測してるのかな?

「爆豪が居ない！」

「何!？」

お、来たか。さあ、爆豪くんは助けたいけど助けられない事情があるし、他の皆を守ろう

「よつと」

「っ!?な、なんでここに居るのが分かった!？」

「そりゃ探知すれば分かるでしょ。という訳で、じゃあね！」

ドガン!!!

「ガハッ!!!」

ヒューーーーーー

おー、またまたホームランだなあ。おつと、何か落としてったな。何だこれ、水色の玉? あ! ここで緑谷くんを爆豪くんの所に連れてかなきゃじゃん! 急げ急げ!

「皆! 早く追いかけるよ! 爆豪くんアイツに捕まってる!」

これは緊急事態だし、仕方ない。隙間を使おう。中は目だと怖いし不気味だから満天の星空にでもしておこうか

「ほら、早く入って!」

私は一足先に行こう。まずいまずい、ここで会わせないとこれから展開に支障が…!

「ご苦労様です。目的は果たしましたか?」

「ああ、無論だぜ。ほら」

「ふむ、もう1人は流石に叶いませんか」

「アイツか、アレはバケモンだ。少なくとも、俺たちだと勝てないと思う」

もう1人? もう1人目的が居たのか? ヴィランの考えてることなんか知りたくないけど、それが誰なのかは知っておかないと

「想起……」

っ!?な、なんで私!? いやいや、私は絶対ヴィランに入る事は無いのに! 何、戦闘狂なのバレた!?

「かつちゃんを…」

「っ! 緑谷くん!? ステイ、ステイ!」

「かつちゃんを返せえ! S M A A A A A A A A T H!!」

「デク……!」

ヤバいアレは死ぬ! 早く、早く助けないと!

「緑谷くん! 動くな!」

「っ!? な、なんだ、体が……!」

ふう、最近流行ってるアニメを調べてきてもらって正解だった。呪術廻戦、だっけ? っつと、その前に回収しないと

「障子! パス!」

「おつと。霧雨! お前は!」

「……皆、しばらくそこで隠れてて。私は、この人達に用がある」

「そんな……! 紗綺ちゃ……!」

悪いけど、ここから先は爆豪くんにも聞かせる訳にはいかない。気絶させよう

「おいてめえ! 何、しやが……る……!」

よし、完了つと。さてさて? この人達は私に何の用かな?

「あなた達は何故私達を狙う?」

「簡単。私達は、命令に従っているだけ。それが知りたいのなら死柄木弔本人に聞きなさい!」

「っ! チツ!! やっぱ私も捕らえるつもりだったか」

向こうに潜入して情報でも頂いてこようか。そうすれば今後に役立ちそうだし。どうしよ

「やっぱりとは? 貴女には分かっていたと?」

「ああ分かっていたとも! あなた達の心を読んだからね! 私に、何の用だ!!」 ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「っ! (強い殺気……やはりこの者、只者では無いと同時に、ヴィラン向きですね)」

ヴィラン向きとかやめてくれないかな。全っ然嬉しくない。とい

うかもうヒーローになってるし！ヴィランに転換する気は微塵もないし！

「フフツ、では貴女は諦めましょう。性格はヴィラン向きですが、貴女は既にアチラを選んだようです。行きましょう」

「あつ、待て！」

「追いつけるなら追いついてみる」

「それでは」

よし、迫真の演技だったのでは？まあ何はともあれ行ってくれたし原作は壊れてないし良かった、良かったけど…！悔しい！目の前で仲間が攫われるのは、例えそう仕向けたのが自分でも悔しい！！

「あつ、紗綺ちゃん…」

「大丈夫…！絶対助けるから…!!」ニカッ

そう、絶対助ける。それで私がどうなろうと、仲間だけは絶対に助ける。そう誓おう。何をしていようと、どんな事があるうと、絶対に助ける

爆豪救出に向けて

爆豪くんは大丈夫かな。いくら私が助けなくて原作に沿ったとはいえ、心配なものは心配だ。少なくとも殺されてはいないだろう。まだ爆豪くんの気配？ 的なものはあるし、なっちゃんに聞いても生きてるって言ってるし

「さてと、そろそろ行きますか」

今日はヒーロー達に呼び出しをくらっている。爆豪くんが連れ去られ、その基地へ襲撃をする為の会議だけど、そこに私は居てもいいものか、そこが不安だ。遅刻するとうるさいし、瞬間移動でもするか
シユン！

つと、ここで合ってるかな。にしてもヒーロー集まってるのが凄い大物ばっかなんだけど

「来たね、霧雨少女！ さあ席に着いて。会議を始める」

……正直面倒。助けるならヒーローとしてではなくて友達として助けたい。その為なら立場を利用するのも考えるけど、こういう陣形を組んで戦うのは私には向いてない

「で、爆豪少年が居るのはここ、この建物に捕まってる。一応エクトプラズムの分身に確かめてもらったが、まだ生きているそうだ」

「作戦は俺から説明します。先ず、特攻するのはオールマイトさん、それとリコール、お前だ。2人にはその場に居るであろう死柄木弔率いるヴィラン連合を捕まえて頂きたい。それが無理であれば倒してしまっても構いません。オールマイトさんに関しては、オールフオーワンの決着を付けなければならぬことになる可能性を想定し、体力はなるべく温存してください」

説明が長い。ともかく私は特攻すれば良いのね？ とオールマイトか、オールマイトは体力温存。これは結構頑張らないとじゃないかな
「そしてシンリンカムイはヴィラン連合の拘束をしてもらいたい」

さてさて、どうせ緑谷くんは助けに行くんだろう。それなら、あまり危険には晒さないようにしないとな。場所は漏らさないし、脳無の工場になんとかして辿り着いてほしい。原作ではそうなってるはず

だし。まあとりあえずそろそろ時間かな

「…私はこの後外せない用がありますので、分身を置いていきます。それでは」

……爺さん、なんでこんな時期にポツクリ逝くかな。悲しむもんも悲しめないじゃないか。あんだけ優しくしてもらったから普通に好きだったし、悲しい。けど、今は悲しんでる暇はない。そんな感情でヴィラン連合に突っ込んだら間違ひなくヤバイ。今日の葬式を済ませたら悲しむのは全部終わってからにしよう

「マスター、あまり無理はしないで下さいね？」

ああ、大丈夫。私は元々そんなに無理が出来るほど強くないさ。程よく休みながらやるよ

「それなら良いのですが」

さて、行こうか。一旦家に帰って着替えてから行かないと。母さんと父さんは先に行ってる筈だし

シュン！

つと、制服で良いんだっけか？よし、これ羽織ってつと。行こう

シュン！

っ！流石に瞬間移動を連発するのはキツイか…

「マスター…」

ん？大丈夫だよ。私は無理はしない。私が無理して壊れたら、私を止められる人はほとんど居ないしね

この後葬式を済ませ、分身に作戦の詳細を説明してもらった。流石に葬式で思念伝達なんて出来るわけが無いからね。とにかく私は2人で突っ込めとの事なので本気でやるつもりである